

エンパイア・スター
Empire Star

サミュエル・R・ディレーニ^{*1} 訳：米村秀雄^{*2}

2007年9月12日

^{*1} ©1966

^{*2} ©1980

アトランティスへ行きたい
そんな思いにとらわれても
むろん見つかるのは
愚者の船だけさ
桁はずれの暴風が吹き荒れそうな
こんな年に航海するのはね
ということはだよ
馬鹿な真似して
新米水夫のふりをする
その覚悟が必要だ
火酒、馬鹿騒ぎ、噂話は
少なくとも好きに見せなくてはね

W. H. オーデン

……真実とはものの見方である

マルセル・ブルースト

目次

第 1 章	1
第 2 章	5
第 3 章	7
第 4 章	9
第 5 章	15
第 6 章	25
第 7 章	27
第 8 章	33
第 9 章	39
第 10 章	47
第 11 章	61
第 12 章	63
第 13 章	69
第 14 章	73
第 15 章	85
訳者あとがき	89

第1章

彼が持っていたもの、

腰まで伸びたブロンドの三つ編み、

フィールド・キーパー農場管理人のゆらめくかがり火に照らされ、ニュー・サイクル栽培期でぐったりとなってまどろんでい

るさまは、まるで猫のように見えるという、褐色に焼けた細身の躰、

オカリナが一つ、

壁や天井に登れる黒いブーツと手袋、

小さくて野性的な顔、それにしては大きすぎる灰色の眼、

栽培期の見回り中に、パワー・フェンス電気柵の裂け目を抜けて忍び込んできた野生のケパードを、今までに三匹殺した左手の真鍮の鉤爪(また、思い出したくもない、二年前の、彼が十六だった時のこと、ビリー・ジェームズとの喧嘩で　ふざけて殴った一発があまりに唐突で強すぎたために本気になってしまった喧嘩だったが　相手を殺してしまったこともある)

赤色巨星タウ・ケチの周りをサイクロイドを描いて巡る衛星リスの洞窟で、地下農場の世話をしながら過ごした十八年の辛い生活、

一か月に最低四回はごたごたをお越し、また過去十四年の間に、コメット彗星<ジョーの仇名 あだながつけられることになった、ふらふらと洞窟住居から出ていく性癖、

彼の嫌いなクレメンスという名の叔父。

そしてのちに、奇跡的にオカリナだけを残して、ほかのすべてを失ってしまった時、かれはこれらのものを、つまり、これらが彼にとっていかなる意味を持ったものであったか、どれほど彼の若さを象徴していたか、また、一人前の男たらんとするにはいかに貧相なものであったかを、思い起こしたのだった。

しかし、彼はそれらを失うことになる前に、二つのもの、つまり、オカリナとともに最後まで彼が持つことになったものを手に入れた。一つはディクという名のデヴィル・キトン悪魔猫の子。もう一つがわたし。わたしはジュエルという。

わたしは物事をさまざまな観点から眺めることのできるマルチブレイクス意識を持っている。それは、内部構造の調和パターンが生み出す倍音系列の、ある機能のことだ。だから、文学界で使われる、全知の観察者としての観点から、かなり詳しくこの物語を語って

みよう。

深紅のタウ・ケチが西の懸崖をかじっている。太陽系の木星ほどの巨星タイアが、点の四半分をよぎる黒い曲線を描き、白色矮星のアイが東の岩場を銀色に輝かせている。小麦色の髪をしたコメット・ジョーが歩く前には二つの影、一つは灰色で長く、もう一つは錆色でずんぐりしている。彼は空をふりあおぎ、迫り来るワイン色の宵闇の中で、一番星をみつめた。少年なら誰にでもあるような爪を^{あと}かんだ痕のある、長い指の右手には、オカリナが握られている。帰るべきだとわかっていた。この夜のもとから洞窟住居の明るい繭のような保護の元に逃げ込むべきだったのだ。クレメンスおじさんには行儀よくすべきだったし、^{フィールドウォッチ}農場監視中にほかの少年たちと喧嘩しないようにもすべきだったのだ。彼にはいくらでもそうすべきだったということがあった

音。岩石と岩石でないものとのぶつかりあう音。

身をかがめ、筋張った細腕の先に死んだように突いている、左手の鉤爪をあげて顔面をかばう。ケパードは眼を狙ってくるからだ。だが、それはケパードではなかった。鉤爪をおろす。

^{デヴィル・キトン}悪魔猫の子が、その八本ある脚の五本を使ってバランスをとりながら、岩の隙間からあらわれ、シュウといった。そいつは体長一フィートばかりで、三本の角と^{つの}ジョーと同じ灰色の大きな眼を持っていた。そいつはくすくすと笑ったが、それは悪魔猫の子が狼狽したときにすることで、普通両親　体長は五十フィートにも及ぶが、誤って踏みつけられない限りまったく無害である　を失くしたことによるのが多い。

「どしたんだ？」コメット・ジョーは尋ねてみた。「おまえのおっかあもおとうもどっかいっちまったんかい？」

悪魔猫の子がまたくすくすと笑った。

「ちがったかい？」ジョーはしつこかった。

小猫は左肩ごしにシュウといった。

「さがしてやるよ」コメット・ジョーは頷いた。「こいや、にゃんこ」眉をひそめて、彼は足を踏み出したが、岩場を進むその裸の躰の動きは、話し方の粗雑さとは対照的に優美であった。岩棚からざらざらした赤い地面に跳び降りると、黄色い髪の毛が肩まで舞い上がり、眼にかぶさってきた。それを彼は振り払う。小猫が彼の足首に身をすりつけ、またくすくす笑うと、大岩の向こうに駆けていった。

ジョーはその後を追った　が、急にとびすさって岩にはりつく。左手の鉤爪と右手の指が花崗岩をひっかく。汗をかいていた。喉の大静脈が激しく脈うち、陰囊が乾燥ブラムのように固くなっている。

緑色した泥水が泡だち、間歇泉のように彼より二フィートも高く燃え上がった。その燃え上がったものの中には、見えないが のたうち、無音の金切り声をあげ、苦悶の内に死につつあるのを 感じられるものがいた。その一つが自由になろうと必死にもがいている。

悪魔猫の子は、その内部の苦悶も知らぬげに、その根元に跳び込み、傲慢にも唾を吐くと、跳び戻ってきた。

ジョーが息を整えていると、その内側にいたものが跳び出してきた。それは煙をあげながら、前によりめいた。灰色の眼をあげる。長い小麦色の髪がそよ風に捉えられ、一瞬の、猫のようにしなやかな動きに、後方になびく。そしてそれは前のめりに倒れた。

何か恐怖を抑えて、コメット・ジョーに手を伸ばさせ、その広げられた両腕をつかませた。手が鉤爪をつかみ、鉤爪が手をつかんだ。彼が跪き、その喘ぐ人間の姿をしたものを腕に抱いた時にやっと、それが彼に瓜二つなのに気付いた。

驚愕が頭の中で爆発を起こし、そのために舌もたががゆるんでしまった。「だれおまえ？」

「きみは持っていかなければ……」その人間の姿をしたものは咳こみ、一瞬、その容貌から明瞭さが失われた。「……持っていかなければ……」とそれは繰り返した。

「なにを？ なにをだよ？」ジョーはとまどい、かつこわがってもいた。

「エンパイア・スターへ伝言を」そのアクセントは、オフワールドー インターリング外世界人の宇宙共通語の明瞭で正確な語調だった。「きみはエンパイア・スターに伝言を持っていかなばならない！」

「なんていうんだい？」

「ただそこへ行って彼らに……」再び咳きこんだ。「ただそこへ行けばよい、どれほど時間がかかろうが」

「いったいそこへ行って、なんていやあいいんだよ？」とジョーは訊いたが、その時それよりも先に訊いておくべきだったことに思い到った。「どっからきた？ どこへいく？ どうしたんだ？」

痙攣がその人間の姿をしたものを走り、背を弓なりにして、それはコメット・ジョーの腕からはじけ落ちた。コメット・ジョーは手を伸ばし、舌を巻き込んでしまわないように、口を開けさせておこうとしたが、その手が届く前に、それは 溶けてしまった。

それは泡立ち、蒸気の煙をあげた。

異変は治まり、あとにはあたりの雑草にはねを飛び散らした泥水の溜りがあるだけだった。悪魔猫の子はその縁まで近寄ると、匂いを嗅ぎ、そして足で何やら掘り出した。静かになった泥水の溜りがどんどん蒸発し始めている。小猫はその何かを口にくわえ、素早くまばたきしながら、ジョーの膝元に持ってくると、坐り直して胸のピンクの綿毛をなめ始

めた。

ジョーはそれを見おろした。それは多彩で多面体、マルチプレックスであり、すなわちわたしであった。わたしは<^{ジュエル}宝石>。

第2章

ああ、われわれ、つまりノーン、カイ、マービカ、それにわたしの長い旅の終焉は、なんと唐突で、しかも悲惨だったのだろう。もちろんわたしは、最初の船が破損して、S・
オーガニフォーム・クルーザー
 ドラドスで有機宇宙船に乗りかえた際に、彼らに警告してはいた。比較的宇宙塵の多いマゼラン星雲内においては、万事が順調に進むだろうが、ホーム・スパイラル
 <母なる大渦>のもっと空虚な空間に入ると、包囊に覆われた機構に触媒作用を起こすものがなくなってしまうだろう、と。

われわれは、タウ・ケチ経由で、吉報と凶報を、つまりわれわれの成功と失敗の記録をもって、エンパイア・スターに向かうつもりだった。ところがオーガニフォーム
 有機宇宙船は外殻を失い、のたうつアメーバのように衛星リスに落ちたのだ。その際の圧力は致命的だった。カイは着地の際に死んだ。マービカは、われわれを浮遊させていた滋養ゼリーの中でもがき苦しみ、百もの白痴成分に分解して死んでいった。

ノーンとわたしは素早く相談し合った。われわれは着地地点を中心に半径百マイル内を、壊れかけのパーセプター
オーガニフォーム
 有機宇宙船は自壊し始めている。その原始的な知能は、この事故のことでわれわれをなじり、殺したいともいった。知覚器が、パーセプター
 巨大な洞窟内でプライアジルを栽培している地球人の小さな植民地を指示した。南方約二十マイルの地点には、そのプライアジルをテラン
ギャラクティック・センター
 銀河中心星域に送り出す小さな輸出港もある。しかし、この衛星自体は信じられないほど遅れていた。「ここは、わたしが昔いたようなシンプレックスな社会だ、それでもまあ、知性的とは呼べる程度ではあるがね」とノーンが評した。「この星では、他の太陽系まで行ったことのある人間など十人と見つからないだろうし、しかもその全員が輸出港で働いている人間のはずだ」

「だがそこにあるのは、敵意を持つこともないし、こんなふうに衝突することもない、信頼できる非有機製の船だ」とわたしはいった。「こいつのせいで、われわれは死なねばならないんだし、もはやエンパイア・スターにも行けなくなってしまった。あそこにあるのがわれわれに適った船なんだ。こいつなんて　ふふん！」プロト・プロトプラスム
 原始原形質の温度が不快なものになってきた。

「近くに子供が一人いるぞ」とノーン。「それに　　いったいあれは何なんだ？」

「地球人は^{デビル・キトン}悪魔猫の子と呼んでいる」わたしは資料を手にしていった。

「明らかにあいつはシンプレックスじゃない！」

「といってマルチプレックスでもない」とわたし。「だが何かであることは確かだ。そいつは伝言を目的地まで運べるだろうか？」

「だが知能は準魯鈍だ」とノーン。「少なくとも地球人のほうがましな脳味噌をもっている。双方を協力させればいい。子供はかなり利口だ　だがシンプレックスだ！　小猫の方は少なくともコンプレックスだから、伝言を運ぶことはできるだろう。それじゃ、やってみよう。まず彼らをここに呼べるかやってみてくれ。きみは結晶化したら、しばらくは^{いのち}生命を存らせるな？」

「ああ」わたしは不安げにいった。「だが、そうしたいとは思わないよ。一つの方法だとは思いますが、非活動体になるのはどうかと思うね」

「非活動体になっても」とノーン。「役にたてるんだよ、特にあのシンプレックスの少年にはね。彼が同意してくれたとすれば、これからの彼には辛いことだらけなんだぜ」

「おお、その通りだ」とわたしはいった。「結晶化するよ。でも好きでやるんじゃないぞ。じゃあ、きみは手筈を整えてくれ」

「くそっ」とノーン。「わたしだって好き好んで死ぬわけじゃないんだ。死にたくはない、生きていたい。わたし自身でエンパイア・スターに知らせたいんだ」

「急げ」とわたし。「時間の浪費だ」

「わかったわかった。どんな形態をとればいい？」

「シンプレックス生命体に対してなんだぞ。彼の注意をひきつけ、しかも翌朝に悪夢と思い込ませないような形態はただ一つしかない」

「わかった」とノーンは再びいった。「じゃあとりかかろう。さよなら、ジュエル」

「さよなら」と答えて、わたしは結晶化を始めた。

ノーンは最後の力をふりしぼって、その煮えくり返るゼリーを突き破り、子供のいる岩場に飛び出していった。こうちだ、小猫、小猫、小猫、とわたしは悪魔猫の子に向かって精神投射をした。そいつは非常に協力的だった。

第3章

コメット・ジョーは、オカリナで静かな調べを奏でながら、洞窟への道をたどっていた。彼はもの思いに沈んでいる。宝石（つまりわたし、ジュエルだ）は腰の小物袋の中。悪魔猫の子は、ホタルに飛びかかったり、立ち止まって足の裏の剛毛を抜いたりしている。一度ごろんと仰向けになり、星に向かってシュウというと、コメット・ジョーの後を追った。まったくシンプレックスとはいえない。

コメットは<美味>の岩棚にたどりついた。岩棚を見渡すと、洞窟の入口に、苛立っている様子の叔父クレメンスの姿が見えた。コメットは舌打ちをして、昼食の残り物を物色しはじめた。夕食がばあになったのがわかったからだ。

上の方から誰かが叫んだ。「ねえ、のろまん！ クレムおじさんおこってるわよ、すごーく！」

彼は見上げた。四番目の従妹のリリイが、高い懸崖の出っ張りにすがりついて見おろしていた。

彼が身振りで合図すると、彼女は彼のそばに降りてきた。短く刈りあげられた彼女の髪の毛を見るたびに、彼はいつも女の子を羨ましく思う。「それ、あんたのデヴィル・キティ悪魔猫の子？ なんてなまえ？」

「こいつぁおれんじゃない」と彼はいった。「おい、だれがおれのブーツとてぶくろつかっていいっていった、ええ？」

彼女は、彼の十二の誕生日にシャローナからもらった、膝まである黒いブーツと、肘まである手袋を身につけていた。

「クレムおじさんがおこってるって、おしえたげようとおもったんよ。そいであんたとこのぼって、あんたがかえってくるんをまってたんだわ」

「くそっ、うそばっかした！ かせせ。おまえはつかいたかっただけなんだ。さあかせよお。おれはつかっていいなんていわなかったぞ」

リリイはいいや手袋を脱いだ。「ジャップなにさ、あんたなんて。たのんだってかしてくんないじゃない」ブーツも脱いだ。

「あたりまえさ」とコメット。

「いいわよ」リリイはそういうと、くるっと背を向け大声で叫んだ。「クレムおじさん！」

「おい……！」とジョー。

「クレムおじさん、ジョーがかえってきたわよ！」

「だまれ！」とコメットはいうと、身を翻し、すたこらと岩棚から逃げ出した。

「クレムおじさん、あいつまたにげてく　　」ちょうどその瞬間、悪魔猫が二本の角でリリイの踝を突き刺し、手袋とブーツを口にくわえると、コメットの後を追った　　それは、誰も彼に何もいわなかったことを考え合わせれば、非常にマルチプレックスな行動である。

十五分後、恐れと怒りに身を震わせながら、コメットは星明かりの岩場に密んでいた。そこへ悪魔猫がやってきて、彼の前にブーツと手袋を落とした。

「うん？」コメットは海老茶色の夕闇の中でそれに気付いた。「やあ、ありがと！」そしてそれを身に着ける。「シャローナだ」と彼はいって立ち上がった。「シャローナのどこにいこう」なぜなら、シャローナが彼にこのブーツをくれたんだし、シャローナは一度も彼に腹を立てたことがなかったし、それにシャローナならエンパイア・スターのことを知っていそうだったからだ。

彼は歩き出しかけたが、ふと悪魔猫の方を振り返ると眉をひそめた。悪魔猫は一般に独立心が旺盛だといわれており、犬のように人間の使い走りなどしない。「^{デヴィル・キティ}悪魔猫の子」と彼はいった。「ディキティ、ディク、それがなまえだ。ディク、おれといっしょにいくかい？」それはひどく非シンプレックスな言動だった　　とにかくわたしはそれに驚いたのだ。

コメット・ジョーは歩き出し、ディクはその後についていった。

第4章

夜明け近くに雨が降った。雨滴が顔面を流れ、まつげを宝石のように飾りあげる。彼は断崖のせりだしの下側に、ナマケモノのようにぶらさがって、輸出区画のゲートを見おろしていた。ディクは彼の腹を揺籃にして坐っている。

明け染める光の中を、二台のプライアジル運送トラックが岩間を縫って進んでいく。一分もすれば、シャローナがそれを中に入れるためにやってくるだろう。世界が上下逆さまになるまで首をそらせると、薄明に赤く染められた雨の中で、ブルックリン橋の架かった、岩のごろごろした谷間を越えて、恒星船が林立している^{ローディング・プラットフォーム} 載荷場まで見ることができた。

道路を一部覆い隠しているチャパー葡萄の茂みから、トラックが出てきた時、シャローナがゲートの方に歩いてくるのが見えた。その先を走っていた^{スリー}3ドッグが、金網越しに停車したトラックに向かって吠えた。悪魔猫が神経質に足を動かす。その名に因んでか、彼は犬を嫌っているのだ。

シャローナがゲートの開閉レバーを引くと、防御柵がひっこんだ。トラックがそこを通り抜けたとき、ジョーは断崖から叫んだ。「おーい、シャローナ、そのままにしといて！」

彼女は禿げあがった頭を起こすと、皺の寄った顔をしかめた。「そのような高いところにいるそなたは？」

3ドッグが吠えた。

「そいつをみはってて」ジョーはそう叫ぶと、岩から離れ、空中で身をひねった。彼とディクはくるくると回転しながら落下していく。そして軽やかに彼女の前に降り立った。

「あら」彼女は、雨できらきらと光る銀色のスキン・スーツのポケットに手をつっこんだまま笑った。「身の軽いおいたさんね。このような良き時期^{とき}をどこに隠れていたの？」

「栽培期のみまわりさ」にやっと笑って彼は答えた。「ほら、あんたのプレゼントをつけてるんだぜ」

「それで立派に見えるわけね。お入りなさい、ゲートを閉めるわ」

コメットは半分まで下がった防御柵の下をくぐり抜けた。「ねえ、シャローナ」雨に濡れた道路を歩きながら、彼は尋ねた。「エンパイア・スターってなに？ どこにあんの？」

「どうやったら、おれそこにいける？」どちらからともなく、彼らは道路からそれ、ブルックリン橋と呼ばれる金属製建造物の下のごつごつした谷間に向かった。

「それは偉大なる星、地球の曾々々祖父らがアウリガと呼んだ星のこと。ここより銀河中心角七二度、五五・九^{ハイパースタティック・ディスタンス}超静止空間距離のところであって 古代の格言を引用すれば 汝、此処より彼の地^い往く^{あた}能わず、ということよ」

「どして？」

シャローナは笑った。3ドッグが駆け出し、ディクに吠えかかった。ディクは小猫のように背を丸めていい返しかけたが、何か思いついたらしく跳びすさった。^{トランスポート}「輸送員ならば行けるわ、でもそなたにはできない。それが問題ね」

コメット・ジョーは眉をひそめた。

「どしておれじゃだめなんだい？」彼は雑草の先を足でなぎ払った。「おれはこの星からでるんだ いまから！」

シャローナが眉毛のあった個所の筋肉をあげた。「そなたはダニのように頑固ね。四百年間そのようなことをいった者は誰もここにはいなかったわ。叔父のもとに帰りなさい、コメット・ジョー、そして洞窟住居で平穩に暮らなさい」

「やだ^{ジャップ}」そういうと、コメット・ジョーは小石を蹴飛ばした。「おれいきたいんだ。どしていけないんだよお？」

「シンプレックス、コンプレックス、マルチプレックスよ」とシャローナが答えた。その時わたしは小物袋の中で目覚めた。ついに希望を見出せたからだろう。そのことを彼に説明できる者がいるのなら、この旅はずっと簡単なものになるのだ。「ここはシンプレックス社会よ、コメット。宇宙旅行はこの領分ではないのよ。ここへプライアジルをトラックで運搬してくる者と、そなたのような好奇心の旺盛な子供数人を除いては、誰もゲートの中には入らないわ。そうして一年もすれば、そなたはやってこなくなり、また、そうした訪問を結局は恥ずかしく思うことでしょう。それでも、ゲートのあたりをうろついたり、星々からの不思議なガラクタを持って洞窟住居に帰ってくる者を目にすれば、そなたの気持ちも少しは和らぐでしょうね。星間旅行をするには、少なくともコンプレックスな物事を処理できなければならないし、それがマルチプレックスな場合もしばしばあるのよ。そなたは自分自身の処理からしてすでに不適格でしょう。宇宙船に乗って半時間もすれば、考えも変わって、すべてを愚行として一蹴し、帰ろうとすることでしょう。そなたがシンプレックスである事実は、ある意味ではいいことなのよ。リスで平穩に過ごせるのですからね。輸出区画への訪問も、わたくしがあげたそのブーツや手袋のような時たまの星々からの品物も、そなたを”墮落させる”ことはないのよ」

彼女は話し終えたようだった。わたしは悲しさを覚えた。というのも、それは明らかに

説明などではなかったからだ。しかも、わたしはジョーが旅に出るつもりなのを知っているのだ。

ところが、ジョーは小物袋に手を入れ、オカリナを脇にのけて、わたしを取り出したのだ。

「シャローナ、あんたこんなもんみたことない？」

わたしの上に彼らのおぼろな姿が大きく現れた。コメットの鉤爪の向こう、陰になった彼らの顔の向こうに、黒いリボンのようなブルックリン橋が、藤色の空に線をひいている。彼の掌がわたしの背面を暖める。ひんやりした小滴がわたしの前面にあたり、かれらの姿を歪ませた。

「どうして……わたくしが……いえ、そんなはずはないわ。どこでそなたはそれを取り戻したの？」

彼は肩をすくめた。「みつただけだよ。なんだとおもうんだい？」

「その七太陽の光からして、結晶化したトリトヴィアンのようね」

彼女はもちろん正しく、そしてここに経験豊かなスペースウーマンがいたことをわたしは知った。われわれトリトヴィアンの結晶化した姿はあまり一般に知れ渡っていないのだ。

「かれをエンパイア・スターにつれてかなきゃいけないんだ」

シャローナは皺の寄った仮面^{かお}の裡^{うち}で沈思しており、その倍音から、それが、銀河の夜の暗黒に見える星々や、わたしも見たことのない不思議な景色、といった宇宙のイメージを持つ、マルチプレックス思考であることがわかった。輸出区画の門番としてリスで過ごした四百年は、彼女の精神をほとんどシンプレックスにまで落としめていたのだ。しかし、マルチプレックス意識は目覚めた。

「そなたに教えておくことがあるわ、コメット。答えてみなさい、この世でもっとも大切なものはなに？」

「ジャップ」と彼は言下に答えたが、彼女が眉をひそめるのを見て、まごついた。「おれのいってるのはプライアジルのことだよ。きたないことばでつかったんじゃない」

「言葉は気にならないわ、コメット。でも、そなたたちがそれをプライアジルの”汚ない言葉”としているのを、わたくしはいつも少し奇妙に思っていたわ。わたくしのもと居た世界の”汚ない言葉”を考えると、それほど奇妙とはいえないけれど。わたくしの育ったところでは水が禁句^{タブー}だったわ。そこにはそれがほとんどなかったからで、技術解説の際に使われる化学式でしか誰も口にしようとはしなかったし、いわんや教師の前では絶対に口にしなかったのよ。また曾々祖父の時代の地球では、一度口に入って体内を通った食物が、上品な人たちと同伴の場合に、その通例の名称で話されることもなかったのよ」

「でも、くいもんやみずのどこがきたないんだい？」

「ジャップのどこが汚ないの？」

彼女が下品な俗語を使ったことに彼は驚いた。しかし彼女は、一般に野卑な言葉使いと尊敬心の欠如で有名な と叔父のクレメンスはいトラッカーローダー運搬人夫や荷役人夫といつも接しているのだ。

「わかんねえや」

「それは、洞窟の闇の中でリスの中心からの放射能でしか開花しない、突然変異種の穀類の花に生じる有機プラスチックなのよ。この星の人たちにとっては、他のプラスチックの補強物質という以外に何の役にも立たないものだけれど、つまるところそれが宇宙経済におけるリスの唯一の意義なの銀河系の他の星に供給することが。つまりそれを必要とするところがあるからよ。リスの男性も女性もみなそれを生産し、加工し、運搬するために働く。それだけのことなのよ。わたくしの説明のどこにも汚ないものなどありはしないわ」

「そうすつと、そのふくろがやぶれてこぼれても、そいつあつまり……うーん、きたないんじゃなくてごメッッごシイイなんだ」

「こぼれた水もこぼれた食物も汚メッシイイわ。でもどちらも本来はそうではないのよ」

「あんたはりっぱなひとのまえじゃ、あるものことはしゃべないんだってね。クレムおじさんがいったよ」ジョーは結局自分の経験に頼った。「それであんたがいうように、ジャップがいちばんたいせつなものなんだから、つまり、えーと……ちつとは尊重しなくっちゃいけないんだね」

「わたくしはそのようなことはいわなかったわ。でもそなたはいった。つまり、それがそなたのシンプレックスである証拠なのよ。第二ゲートを通して輸送船の船長に便乗を頼みに行ったなら恐らくそれは認めてもらえるでしょうね、彼らはいいい人なのだから

もうそこは違った世界なのよ。そこでは、ブライアジルなど、トンあたりただの四十クレジットでしかなく、ダーニイやキブルポップ、おしゃべり箱クラッパーボックスやボイシュなど五十クレジット以上するものに比べれば、全然大切なものではないの。そうしてそなたはそれらの名を叫びだし、うるさいやつと思われるようになるかもしれないわ」

「おれはわめきちらす気なんてないよ」コメット・ジョーはきっぱりといった。「それにあんたのその早口から”シンプレックス”についてわかったことはだな、たとえほかのおおぜいがしっていなくても、お上品にする方法をおれはしってるってことさ おれがそれほどお上品じゃないことはわかってるけど、どんなふうによればいいかはしってるんだ」

シャローナが笑った。3ドッグが駆け戻ってきて、その頭を彼女の腰にこすりつける。

「そなたが自分で悟らなければ理解できないことは、よくわかっているのだけれど、一応簡単に技術用語だけを使って、それを説明してみましょう。立ち止まって見上げてごらん下さい」

かれらはごろごろした石の間で立ち止まり、見上げた。

「穴が見える？」と彼女が訊いた。

橋床の被覆のあちこちに、光の通る針穴があった。

「でたらめな点のように見えるでしょう？」

彼は頷いた。

「それがシンプレックスな見方よ。さあ、今度は歩きながら見てごらん下さい」

コメットはじっと上をみつめたまま歩き出した。点の光が瞬き、そこかしこに別の点が現れ、そして再び瞬くと、それ以上の点が、それとも初めから設けられていたのかもしれない点が現れた。

「橋の上には、橋桁の上部構造があって、それが穴を覆い隠してその全容をすぐには知覚できないようにしているの。そして今、そなたはコンプレックスな見方をしている。一つの地点から見える以上の穴があるのを知っているのですからね。さあ、上を向いたまま、走ってみなさい」

ジョーは岩場を走り出した。瞬きの速度が増し、突然彼は穴が一つのパターンを成しているのを、つまり七つの穴の対角線が交わってできた六芒星であるのを知った。全体のパターンが知覚できたのは、瞬きの変転がより速くなったからであった

彼はつまずき、手と膝をついた。

「そのパターンがわかった？」

「えっ……ああ」ジョーは頭を振った。手袋を着けた掌と片膝がひりひりと痛む。

「それがマルチプレックスな見方よ」

3 ドッグが身をかがめて彼の顔をなめる。

ディクがみつまたになった灌木の枝から嘲るように眺めていた。

「これでそなたは、シンプレックスな者がマルチプレックスな見方を会得しようとする際の大きな困難に出会わしたのよ。その顔ではあまり納得がいかなかったようね。そなたはまだ若く、実際わたくしにはそなたがそれをえとくできるかどうかわからないけれど、年長者の言葉は聞いておいた方がいいわ。わたくしはそなたの幸運を祈りましょう。でも、旅も最初のうちなら、そなたはいつでも引き返してこれるのよ。しかも、ラッツホールまでの短い旅行でさえ、そなたはリスの人々の誰よりも多く宇宙のことを知るようになるでしょう。でも、遠くに行くにつれて、戻ることは難しくなるわ」

コメット・ジョーは3 ドッグを押しつけて立ち上がった。彼の次の質問は、その試練へ

の恐怖と両手の痛みの両方から起こったものだった。「ブルックリン橋」といまだ見上げたまま彼はいった。「どうしてあれはブルックリン橋っていわれるんだい？」それは答えのない質問であったが、彼の意識が正確にその真の意味を把握していたなら、「どうしてその建築物はおれを旅立たすためにそこにあるのか？」と訊いていたであろう。

だが、シャローナは答えていた。「地球には、二つの島にまたがった、これと同じ建築物があるの　　このよりは少し小さいけれど。”橋”というのは、この種の建築物の名称で、ブルックリンはそれが架かっている場所の名前、だからブルックリン橋と呼ばれるのよ。初期の植民者たちがここにあるそれにその名を付けたの」

「あんたはわけがあるっていうんかい？」

シャローナは頷いた。

突如ある考えが頭にとりつき、駆け回り、耳の後ろでがんがんと鳴り出した。「おれ地球にいけるかな？」

「遠くはないわ」とシャローナはいった。

「それでブルックリン橋はみれる？」落ち着かなげに彼の足がブーツの中で動く。

「わたくしが四百年前に見に行った時には、まだ架かっていたわ」

突如コメット・ジョーは飛び上がり、空に向かって拳を突き出した。それはわたしに希望をもたらす、まさにコンプレックスな行為であった。ついで彼は駆け出し、橋の支持架の一つに跳びのり、喜びのあまり百フィートも駆けのぼった。

途中で彼は止まって、見おろした。「おーい、シャローナ」と叫ぶ。「おれ地球にいけ！　このおれ、コメット・ジョーがさ、地球へ行ってブルックリン橋をみるんだ！」

わたしたちの下方では、門番がほほえみながら、3ドッグの頭を撫でていた。

第5章

雨が止むと、彼らは橋の下から出た。欄干をのりこえ、雨で黒ずんだ舗装エプロンを第二ゲートの方へ歩いていった。「決心は変わらないのね？」シャローナがもう一度尋ねた。

ゆっくりと彼は頷いた。

「ではそなたの叔父が尋ねてきたら、なんと答えようかしら、彼はきっとやってくるでしょうしね」

クレメンス叔父さんのことを考えると、彼は気が重くなった。「ただでてったっていやあいいさ」

シャローナは頷き、開閉レバーを引いた。ゲートが上がる。

「そなたはそれを連れていくつもりなの？」シャローナがディクを指さした。

「うん。いけないかい？」そして大胆に彼は足を踏み入れた。ディクは左右を見、そして彼の後を追った。シャローナは随伴してやるつもりだったが、突然、第一ゲートで再び彼女を必要としている合図のランプが点いた。それで、ゲートが降りるまで、目で彼の後を追っただけで、それから橋を渡って戻っていった。

*

彼は今まで、宇宙線の球状の形態や、港湾管理ビルや、輸出区画の通路を往来しているメカニカル・ローダー 載荷機械や搬送ソリを、第二ゲート越しにしか見たことがなかった。だから、ゲートを通り抜けると、あたりを見回して、シャローナがいったように世界が違ってくるのを待った。ところが、彼の違っているという概念は、かなりシンプレックスだったため、二十フィートも進むと、彼は失望していた。

もう二十フィートも進むと、失望はありきたりの好奇心にとってかわった。背の高い人間をのせた滑走円盤ソーサー・スレッドが通路を彼のほうにやってくるのが目に入った。それが彼のいるところにまっすぐ滑ってくると知って、恐怖と驚愕が小さな爆発を起こす。一瞬後、それは停止した。

そこに立っている女性　それがわかるのに一分かかった、というのも彼女の髪は男のように長く、入念な、しかも見たことのない結い方ゆをしていたからだ　は同じ入りだが

生地が異なる布をくっつけ合わせているためにきらきらと輝く、赤いドレスを身に着けており、それが夜明けの湿気を帯びた微風にまとわりついたり、翻ったりしている。彼女の髪も唇も爪も赤いのに彼は気がついた。それは異様であつた。彼女は彼を見おろしていった。「あなた、美少年ね」

「なんだって？」コメットが訊き返す。

「美少年ねっていったのよ」

「くそっ、おれのいってんのは……えーと……」そして彼は自分の足から彼女に目を移した。

「でもあなたの髪はむさくるしいわ」

彼は顔をしかめた。「むさくるしいってどういうことさ？」

「わたしのいった通りのことよ。ところであなたどこで宇宙共通語インターリングを習ったの？ それともわたしがただあなたの口頭の発音から精神感応テレパシーのように感じ取っているだけなのかしら？」

「なんだって？」

「気にしないで。それでもあなたは美少年よ。クシをあげるわ、それに言葉も教えてあげましょう。船までおいでなさい どうせすぐに発つ船はほかにないのだから、わたしの船に乗るんでしょ。サン・セヴェリナを訪ねてきなさい」

滑走円盤が向きを変える。

「おい、あんたはどこへいくんだい？」コメット・ジョーは大声で尋ねた。

「まず髪の毛をときなさい、そうすればレッスンの時にでもそのことは話し合ひましよう」彼女はドレスの折り目から何かを取り出し、彼に放り投げた。

彼が受け取ったものは、赤いクシだった。

彼は自分の髪のを丸ごと肩越しに引き寄せると検分してみた。それは輸出区画までの前夜の旅でもつれてしまっている。そのクシが、もつれをとかすのを楽にしてくれる特別な種類のものであることを期待して、何度かとかしてみた。でもちがった。だから全部とかすのに十分間ほどもかかって、それが終わるとそんな苦行を繰り返すのをなるべく先送りにしようと思い、片方の肩のところで手際よく三つ編みにしてしまった。そして小物袋にクシを入れると、かわりにオカリナを取り出した。

彼が山なす船荷のそばを通りかかった時、彼よりいくつか歳上の男が膝を抱いて、その箱の上からじっと彼を見つめているのを目にした。男は裸足でシャツも着ておらず、擦り切れたズボンズボンをロープでとめている。その髪の毛は無性的な長さで、ジョーのよりもひどくもつれていた。彼はひどく汚く、薄笑いを浮かべていた。

「やあ！」とジョーは声をかけた。「どっちへいったら船にのれるかしってる？」

「あんだ」と少年は言って、輸出区画の向こうを指さした。「ジャップとルルんだ」

ジョーは少し面くらってしまった。少年のいった言葉で理解できたのが呪い言葉だけだったからだ。

「おれのりたいんだ」ジョーは繰り返していった。

「あんだ」といって、再び少年は指さす。そしてオカリナを吹くように両手を口にあげた。

「やりたいんかい？」とジョーは訊いたが、実際はして欲しくなかった。その少年がひどく汚かったからだ。

だが少年はほほえみながら、首を横に振った。「宇宙船ゴロなんだ、音楽やんたくないんさ」

それはおそらく半分は意味があるのだろう、多分。「あんたどっからきたんだい？」ジョーは尋ねた。

「宇宙船ゴロなんさ」少年は繰り返した。今彼は、地平線上にかかるピンクの月の月を指している。「いったりきたり、いったりきたり、そんだけなんさ」再びほほえむ。

「ああ」とジョーは答えたが、そのあとどういっていいか思いつかないので、同じくほほえんだ。この会話に実りがあったのか彼にははっきりわからない。再びオカリナを吹きながら、彼は歩き出した。

こんどは真直一隻の船に向かった。彼がそれに目星をつけたのは、それが荷積みの最中だったからだ。

恰幅のいい男が、リストと積み荷の照合をしながら、ロボ積載員を指揮していた。雨に濡れたままの脂で汚れたシャツを、毛深い腹部で結んでいるので、その結び目の上下の部分が膨れて見える。

ジョーと同じくらいの歳の少年が、船から伸びている繫留索によりかかっていた。さっきの少年のように、彼も薄汚れていて、靴もシャツも身につけていない。ズボンの片膝は破れ、バンドがわりに針金を使っている。その日焼けした顔は、さっきの少年ほどうまくは微笑できないようだ。少年は綱から躰を起こして、通り過ぎる際にジョーをよく見ようと、ゆっくりと歩き回り始めた。

ジョーは荷積みをチェックしている大男に近づきかけたが、彼が積載員の間違った積み方を直すのに忙しそうなのでやめた。彼は再び少年に目を向け、にこっと笑って頷いた。コメントはあまり話したい気分ではなかったが、少年はすぐに頷き返したし、大男の方もしばらくは忙しそうなお様子だった。

「あんた宇宙船ゴロかい？」ジョーは尋ねた。

少年が頷く。

「あんたもあっこからきたんかい？」彼は、^{ムーン・ムーン}月の月の円盤を指さして訊いた。

少年が再び頷く。

「おれにも船で……えー、どっかへいけるチャンスあるかな？」

「仕事をしたいんならあるぜ」と少年はいった。

そのアクセントにジョーは驚いた。

「うん」とジョー。「しごととしても、どうってこたないな」

少年が伸び上がって、「おーい、エルマー」と叫んだ。男が振り返り、腕輪型コンソールのスイッチをはじくと、^{ローダー}ロボ積載員が全部止まった。かんだんだな、とジョーは思った。

「何か酔うか？」と額を拭いながらエルマーが訊いた。

「二人目の宇宙船ゴロを見つけたよ。こいつが仕事を欲しがってるんだ」

「そいつはよかった」とエルマー。「それじゃおまえがやつの世話をしてやれ。よさそうな青年だ。うまいものをたらふく喰わせれば、一人前に働くさ、保証してやるよ」彼は薄笑いを浮かべると、^{ローダー}ロボ積載員の方に向き直った。

「おまえは雇われたぜ」少年がいった。「おれの名はロン」

「ジョーだ」とジョー。「みんなはおれのことコメット・ジョーっていうよ」

ロンが大声で笑い出し、ジョーの手を握って振った。「おれは絶対そう呼ばないぜ。この六ヶ月間^{ステイシスカレント}静止空間流を突っ走ってきたが、その間に会おう真のスペースマンの全部が、^{ダークサイド・プラネット}ボブやハンク、そしてエルマーといった連中なのさ。だけどどこかの未開惑星や単一生産型シンプレックス社会に着いたら、たちまち全員が<スターマン>であり、^{コスミック}<宇宙のスミス>であり、<コメット・ジョー>なんだぜ」ジョーの肩を叩く。「怒るなって、実際すぐにおまえの<コメット>は失くなるんだから」

ジョーが気分を害さずほほえんだのは、主に、ロンが何のことを話しているのかわからなかったからであった。「あんたどっからきたんだい？」

「星々を飛び回り、しょうがない時にちょっと仕事をしたりして、一年はケンタウリ大学を離れていたことになるかな。ここ二、三カ月は、銀河のこの区域で宇宙船ゴロの仕事をしている。おまえ、エルマーに気がついたか、ここではおれを本当のスペースマンのように見て話していたのを？」

「あっこにすわってるやつもかい？ あいつもその……なんとか大学からかい？」

「ハンクのことか？ 船荷に坐ってる未開惑星出身のノープレックス野郎のことかい？」

ロンが笑った。

「ノープレックスって？」とジョーが訊く。彼はその日の朝学んだものと言葉を結びつけた。「シンプレックスとかコンプレックスみたいなもんかい、そいつは？」

ロンにはその質問がまじめなものであることがはっきりとわかった。「実際には、ノー

プレックスなんてものはない。だけど時々あるんじゃないかと思うこともある。ハンクはリスとムーン・ムーンの間をゴロついてるだけさ。やつの一族はど貧民だから、やつには自分の名前すら読み書きできないと思うね。たいていの宇宙船ゴロは似たようなものさ、じきにわかることだかな。やつらは普通二惑星間を行き来するだけで、それがやつらの見れるすべてなんだ。けどまあ、おれにしたって恒星間を飛び回るだけなんだがね。おれはこの片道行が終わるまでに航^{ハーフ・スピ}宙士^{メイト}の地位に就きたいんだ。そうすれば少しは金をもつておれは大学に戻れるからな。しかし、おまえはどこかでまた仕事を見つけなくちゃならんだろうな。どこらへんまで行くつもりだい？」

「エンパイア・スターさ」とジョーはいった。「あんた……それがどこにあるかしってるかい？」

「もうスペースマンのアクセントをつかもうとしてるんだな？」とロンがいう。「気にするな、知らぬ間^まに身に着いてしまうものさ。エンパイア・スターだって？ 確か銀河中心角七〇か七五度だったと思うな」

「七二度さ、五五・九の距離にある」とジョー。

「知っててどうして訊くんだ？」とロン。

「どうしてってそれはおれにゃなんの意味もないからさ」

ロンがまた笑った。「ああ、わかったよ。おまえはまだ宇宙に出たことがないんだな？」

ジョーは頷いた。

「わかったよ」とロンは繰り返す、もっと大きな声で笑った。「まあ、すぐにその意味がわかるようになるさ。おれを信じろ、きっとそうなるんだから！」そしてロンはディクを見た。「そいつはおまえのかい？」

ジョーが頷く。「いっしょにつれてけるだろうか？」

「エルマーが船長だ。彼に訊いてみな」

船長の方を窺うと、彼は積^{ローダー}載員の上ののぼって懸命に船荷を整理していた。「そうか」といって、ジョーは彼の方に向かった。「エルマー」

ロンがジョーの肩をつかみ、ぐるっと振り向かす。「なんだよ？ ジャップくそっ」

「今じゃだめだ、ノープレックス！ 仕事を終えるまで待つんだ」

「でもあんたは」

「おまえはおれじゃない」ロンがいった。「それにおれが彼を呼び止めた時は、彼は積荷のバランスをとっていなかった。名前で呼んだりしたら、彼は仕事の手をとめねばならず、それでもし積荷が倒れたりすれば彼は死んでいたかもしれないんだぞ」

「そんなら、おれはどうよんだらいいんだ？」

「船長でやってみな」とロン。「それが彼のことだから、おまえがそう呼んでも彼の都合

がよくなければ、彼はしていることをやめなくてもいいことになっている。ただ緊急事態の場合なら、エルマーと呼んでもいい」ジョーを横目で見ると。「それよりもまあ、誰かに緊急事態かどうか判断してもらった方がいいな。彼がとやかくいわない限り、おまえにとつては、彼は”船長” なんだから」

「あんたがよんだときは緊急事態だったのかい？」

「彼は今回の航行にもう一人宇宙船ゴロを欲しがってたし、それにおれは彼が手を休めてもかまわないのを見ていた……とにかく、おまえにはいろいろ学ぶことがあるのさ」

ジョーはしょげたようだった。

「元気を出しな」とロン。「おまえはそのさつまいもで立派にやれるんだから。おれは船内にギターを持ってんだ 取ってくるからいっしょに演らないか、なあ？」彼は繫留索をつかむと手を繰って登っていった。そして突き出たハッチの中に消えた。ジョーは目を丸くしてじっと見ていた。ロンは手袋も着けていなかったのだ。

ちょうどその時エルマー船長がいった。「おい、小猫は連れていってもかまわんが、その手袋とブーツは脱がんといかんぞ」

「ええっ？ どうして？」

「わしがそうだったからだ。ロンは？」

その宇宙船ゴロがハッチから顔を覗かせた。「何です？」彼はギターを手にしている。

「こいつに文化の禁制品のことを説明してやれ」

「オーケー」とロンはいうと、両足と片手を使って繫留索を滑り降りてきた。「今それを捨てた方がいいんだ」

不承不承ジョーは手足からそれを脱ぎ始めた。

「おれたちがそのブーツを作ったテクノロジーよりずっと低いテクノロジーを持って、コンプレックスな文化社会を渡り歩いていることはわかるな。そういうものが世間に知れ渡ったら、彼らの全文化を腐敗させてしまうかもしれないんだ」

「ここじゃブーツなんて作れない」とジョー。「だからシャローナがくれたんだ」

「それはここのおまえらがシンプルクスだからだ。おまえらの文化を腐敗させるものなど何もありません、別の環境に移されない限りは。いや、そうなっても、恐らく同程度まで追いつこうとするだろうな。ところがコンプレックス社会っていうのは気難しいものなのさ。おれたちはジェネシスまでジャンプの荷を運ぶ。それからルルをラッツホールまで運ぶ予定だ。行きたきゃそこで地球行きの船を拾えるぜ。地球を見たいんだろ。みんなそうだもんな」

ジョーは頷いた。

「地球からならどこへでも行ける。多分おまえはまっすぐエンパイア・スターに行くん

だろうな。何のためにそんなところへ行くんだい？」

「伝言をもってくんだ」

「ほんとかい？」ロンはギターの調弦を始めていた。

ジョーは小物袋からわたしを取り出した。誰彼となくあまり見せ回ってもらいたくないのだが。結晶化しているいないにかかわらず、わたしが人目をひいたなら、かなり動揺する連中が少しはいるからだ。

「これ」とジョーはいった。「これをそこにもってくんだよ」

ロンがわたしを覗き込んだ。「ああ、なるほどな」ギターをおろす。「それだと積荷のルルといっしょに行った方がよさそうだ」

わたしはひとりほほえんだ。ロンはマルチプレックスな教育を受けた若者だったのだ。ジョーがハンクにわたしを見せていたらどうなっていただろう、考えるだけでもぞっとする。ほかの宇宙船ゴロなら、ジョーをそそのかしてわたしを何かほかのものと交換させようとしただろうし、そうなれば悲惨なことになっただろう。

「ルルってなんだい？」ジョーが訊いた。「それはジャップよりたいせつなもののひとつかい？」

「おやおや、あたりまえさ」とロン。「全然見たことないのかい？」

ジョーは頷いた。

「じゃあ、ついてきな」とロン。「演奏は後でもやれる。ブーツと手袋はほうり投げてハッチまで登るんだ」

ジョーは舗装エプロンターマックに二つとも置いて索を登り始めた。それは思ったより簡単だったが、上に着いた時には汗をかいていた。ディクは、その吸盤状の足を使ってやすやすと船体を登り、ハッチで彼を待っていた。

ジョーはロンの後について、通路を、そしてもう一つのハッチを通り抜け、短い梯子をおりていった。「ルルはこの中にいる」ロンが円形ドアの前でいった。まだギターのネックを握ったままだ。彼がドアを押し開くと、何かはジョーの胃の脇をつかみ、そしてよじった。涙が限にあふれ、口が開く。呼吸がひどく遅くなり始めた。

「実際、おまえは、痛めつけられてるんだろ？」ロンが低い声でいった。「中に入ろう」

ジョーはびくつき、薄闇に踏み込んだ時には、一歩ごとに彼の勇氣は二十フィートも落ち込んだ。眼をはっきりさせようとまばたきをするが、すぐに涙が出てくる。

「あいつらがルルだ」ロンがいった。

ジョーはロンの日焼けした顔に涙を見た。そして再び前方に目を戻す。

そいつらは手首と足首を鎖で床につながれていた。七匹、とジョーはその数を数えた。そいつらの大きな緑色の眼が、船倉の青い照明の中でまばたきする。その背中には瘤があ

り、頭は毛むくじゃらだ。躰は頑健そのものというふうに見える。

「おれはなにを……」ジョーはいおうとしたが、何かが喉につまり、声がかすれた。「おれはなにを感じてるんだ？」と囁くようにいう。それが声に出すことのできた一番の大声だったからだ。

「悲しみさ」とロンがいった。

いったん名前がつけられると、彼にもその感覚がわかるようになった。筋肉からすべての動きを、眼からすべての喜びを流出させた、圧倒的に巨大な悲しみが。

「やつらが感じさせてるのか…悲しみを？」ジョーが訊く。「どうして？」

「こいつら奴隷なんだ」とロン。「こいつらは建設する。美しく立派に建設するんだ。こいつらにはすごい値打ちがあるんだぜ。帝国の半分以上はこいつらが造ったんだからな。だから帝国はこんなふうにかいつらを保護するのさ」

「保護するって？」ジョーが訊く。

「こんなふうを感じないで、やつらに近づくのはできないってことさ」

「じゃあ、だれがやつらを買うんだい？」

「そんなに多くはいない。それでも充分なんだ。だからやつらは信じられないほど高価な奴隷なのさ」

「どうしてやつらをはなしてやらないんだい？」とジョーは訊いたが、その言葉は途中から叫び声になってしまった。

「経済なのさ」とロン。

「あんたはこんなふうを感じさせるその経済というもんをどうおもうんだい？」

「大多数の人間にゃ縁のないことさ」とロン。「そてれがルルの保護になってるんだ」

ジョーは指の関節で目頭を押さえた。「こっからでしょう」

「もうちょっといろよ」ロンがいった。「やつらに演奏を聞かしてやろうぜ」木箱に腰をかけ、ギターを膝に置いて、音階コードをひいた。「演れよ」とロン。「伴奏してやるから」

ジョーは吹き始めたが、息が弱かったために、音は震え、途中で跡絶えてしまった。「おれ……おれやりたくない」とジョーはいった。

「それがおまえの仕事なんだぞ、宇宙船ゴロ」ロンがさりりという。「船荷がいったん積み込まれたら、その世話をしなくちゃならない。こいつらは音楽好きだから、これがやつらを喜ばせることになるんだ」

「それで……おれもうれしくなるんか？」ジョーが訊いた。

ロンはかぶりを振った。「いいや」

オカリナを口にあて、ジョーは肺いっぱい息を吸い込んで吹いた。長い音色が船倉を満たし、ジョーが眼を閉じると、涙が目蓋の裏の暗闇を溶かした。ロンのオブリガートが

ジョーのオカリナから生まれたメロディを一つにまとめあげていく。ジョーが眼を閉じ涙を流して演奏していると、香料のような刺激を持ったそれぞれの音色が、彼の眼前に、ブライアジルが不作だった栽培期のこと、ビリー・ジェイムズの葬式のこと、^{パワー・フェンス}電気柵の発電機の裏でリリイにキスしようとして笑われたあの日のこと、そして殺したケパードの重量を測り比べて、彼のがイル・オディックのよりも十ポンドも少なかった　しかもイルは彼より三つも歳下で、いつもみんなは彼女を立派だと言っていた　のを知った時のことなど、要するに、彼がシンプレックスだった時のすべての悲しく痛々しい思い出を呼び起こした。

半時間後、穴蔵を出て、ロンがハッチをしっかりと閉めると、波がひくようにその感覚が去り、ジョーは疲労と悪寒を覚えた。

「つらい仕事だろう、なあ？」ロンがほほえみながらいった。涙が彼の汚れた顔に縞を作っている。

ジョーは、今なお喉を締めつけているホームシックにむせび泣くのを必死に抑えようとするだけで、何もいわなかった。いつでも引き返してこれるのよ、とシャローナはいつていた。彼がほとんどそうしようと決めかけたところに、ラウドスピーカーから声がした。「美少年は宇宙共通語の^{インターリング}レッスンにいらっしやい」

「あれはサン・セヴェリナだ」とロン。「彼女はおれたちのただ一人の乗客で、ルルは彼女のもののなのさ」

とたんに、すべての感情母型^{マトリクス}がジョーの頭の中で破裂し、激怒、恐怖、好奇心がせめぎ合った。そして好奇心が勝利をおさめた。

「彼女の船室はそこをあがって角を回ったところだよ」ロンがいった。

ジョーは歩き出した。どうして彼女はあの信じられないような生物を所有する気になったんだろう？

第6章

「たいへんな進歩ね」彼がドアを開けるや、サン・セヴェリナがいった。「あなたはわたしがどうしてあの信じられないような生物を所有する気になったんだろうと思っているわね」

彼女は豪華なバブル・チェアに坐り、首から踝まで青色ですっぽりと包まれていた。その髪も唇も爪も青色だ。

「一口ではいけないわ」と彼女はいった。

彼は中に入った。一方の壁が本棚で埋め尽くされている。

「少なくともあなたは」とサン・セヴェリナは言葉を続けた。「彼らの近くにいる時にそれを感じなくてはならないだけ。でも、わたしは所有者として、所有権の続く限り絶えずその感覚を受けさせられるのよ。それが契約の一部なの」

「あんたはあれを感じてるの……いまも?」「あなたが少し前に感じていたのよりも、やや強烈に。わたしの感覚帯はあなたよりもずっと広域なのよ」

「でも……どうして?」

「どうしようもないことなの。わたしには再建しなければならない八つの世界と、五十二の文明、そして三万二千三百五十七の完全に別個な倫理大系を持つ社会があるのよ。そのためにはルルは不可欠なの。そのうちの三つの世界は、地表に一滴の水もなく、黒い焦土と化しているし、一つは半ば火山のようになっていて、もう一度完全に地殻から覆い直す必要があるわ。また一つは大気をほとんど失ってしまっている。残りの三つは何とか住むことはできるけれど」

「なんがおこったの?」ジョーには信じ難いことだった。

「戦争よ」とサン・セヴェリナ。「それに今は千年前よりもずっとずっとひどい状態なのよ。六百八十億五十万二百五人もの人たちが二十七人になってしまったわ。だから、残った財貨をかき集めてルルを買い入れる以外に策は残されていなかった。わたしは今、地球経由で彼らを持って帰る途中なのよ」

「ルルか」ジョーは繰り返した。「やつらなんなんだい?」

「あの若者に訊かなかったの?」

「いや、でも」

サン・セヴェリナの微笑が彼を押し留めた。「ああ、コンプレックス意識の芽生えなのね。一つの答えを得ると、次のを訊く。それでいいのよ。じゃあ次の答えをあげるわ。彼らはこのマルチプレックス宇宙の不面目であり、悲劇でもあるの。彼らが自由になる時まで、人間は誰も自由とはいえないわ。彼らが売買される間は、いかなる人間であっても売買されるかもしれない。その値段はたいへん高くつくでしょうけれど。さあ、始めましょう、あなたの^{インターリング}宇宙共通語のレッスン時間なのよ。その本を取ってくれる？」

まごつきながらもおとなしく、ジョーは机から本を手にとった。

「どうしてしゃべりかたなんかおぼえなくちゃなんないんだい？」本を手渡ししながら彼は訊いた。

「ほかの人たちにあなたのいうことをわかってもらうためよ。あなたは長い旅をするんだし、その終わりには正確に、しかも的確に伝言を伝えなければいけないのよ。それが誤って伝わったりすれば、ひどいことになるわ」

「それがなにかさえおれはしんないんだぜ！」とジョー。

「それを伝える時がくるまでにはわかるわ」とサン・セヴェリナ。「だから、あなたは今勉強することが一番大切なのよ」

ジョーは落ち着かなげにその本を見た。「でもたぶん、ねてるまにとか、催眠術みたいなもんで、すぐにパッとおぼえられるもんがあるんだろ？」そういつてから、彼女のクシで味わった失望を思い出した。

「そういうものは今持ってないわ」と悲しそうにサン・セヴェリナ。「あの若者が説明したと思っていたわ。わたしたちはやや原始的なコンプレックス社会の中を航行しているのよ。文化の禁制品はまったく認められていないの。だからあなたは独力で覚えなければならぬわ」

「^{ジャップ}ちえっ」とジョー。「かえりたいや」

「たいへんいいことだわ。でも、ラッツホールで船を捜さなくては戻れないわよ。もうわたしたちは、リスから十五万三千マイルも離れているんですからね」

「ええっ？」

サン・セヴェリナが立ち上がり、一方の壁を覆ったベネチアン・ブラインドを引きあげた。ガラスの向こうにあったのは、暗黒、星々、そしてタウ・ケチの赤い円盤。

コメット・ジョーはぽかんと口を開けたまま、突っ立っていた。

「あなたがぐずぐずしていなければ、少しは勉強できたかもしれないのに」

タウ・ケチの円盤が次第に小さくなっていく。

第7章

船内での実際の仕事は、地下農場でのプライアジルの世話のように至極簡単なものだった。いったんそれが日課となったら、ルルを除いては、比較的楽しいものであった。特にサン・セヴェリナの知性と魅力が、日課の中でも言語レッスンをとりわけ楽しいものにしてくれた。一度彼女はジョーとわたしを少しびっくりさせたことがある。それはレッスンの時のことで、彼もことさら反抗的になっていたようだが、どうして自分の宇宙共通語^{インターリング}を改めねばならないのかと、別の理由を求めて彼女にくってかかったのに対して、彼女はこういったのだ。「それに、あなたのまずい話し方が、どれほどあなたの読者を疲れさせるか考えてもごらん下さい」

「おれの何だって？」彼はすでに苦労して子音を完全に修得していた*1。

「あなたはたいへん重大な仕事を引き受けたのだから、いつの日かきっと誰かがそのこと書き表わすことでしょう。あなたが言葉の使い方を改めない限り、読者は四十ページも読んでくれないわ。いよいよ物語も佳境に入ってきているのだから、あなたは真剣に取り組むべきだと思うし、あなたのひどい文法や発音のせいで、みんなに途中で放り出されたら、あなたも悲しいでしょう？」

サン・セヴェリナ陛下は、ちゃんとわたしのことを勘定にいれていた。

それから四日後のこと、エルマーがT字型展望窓で腰を降ろして口笛を吹いているのをジョーは見つけた。(明らかに)邪魔をしても死を招くようなことにならないと充分確かめてから、彼は両手を船長の背においていった。「エルマー？」

エルマーが振り返った。「うん。何だ？」

「エルマー、どうしたらみんなのように船でしていることがわかるんだろう？」

「そりゃあ、やつらの方がおまえより長いことやっているからだ」

「仕事のことじゃないんだ。おれの旅のことや伝言のこと、つまり全部のことだよ」

「ああ」エルマーが肩をすくめてみせる。「シンプレックス、コンプレックス、マルチプレックスだ」

*1 これまでジョーは子音の t のほかにいくつかの子音の発音ができなかった。

ジョーの理解できないことに対して、その三つの言葉が答えとして与えられるのには、もう慣れっこになってはいたが、今度ばかりは問いつめてみた。「おれは別の答えがほしいんだ」

船長は膝に身をのりだし、鼻筋を親指でこすると、眉をひそめた。「そりゃあ、おまえがエンパイア・スターヘルルに関する伝言を持って行かねばならんといって、船に乗ってきたんだから、わしらは　　」

「エルマー、ちょっと待ってくれ。どうしてあんたは伝言がルルに関するものだと知っているんだ？」

エルマーは驚いたようだった。「そうじゃないのか？」

「おれは知らないんだ」とジョー。

「ああ」とエルマー。「そう、わしにはわかる。それはルルに関係があるんだ。ルルにどう関係あるかはあとで自分で見つけなくちゃいかんが、関係あるとだけはいえるな。だから、ロンは何よりもまず先にやつらを見せたんだし、サン・セヴェリナはあれだけおまえに関心を持っているんだ」

「でも、どうしておれの知らないことをみんなは知っているんだい？」再び喉の奥で憤怒が膨れあがるのを感じた。

「おまえはエンパイア・スターに行こうとしている」エルマーな辛抱強くいった。「そしてルルを保護しているのは帝国なんだ」

コメット・ジョーは頷いた。

「彼らは、やつらのことに非常な関心を持っている、彼らとしちゃそうでなければならんし、またわしらだってみんなそうなんだがな。おまえは結晶化したトリトヴィアンを連れていて、トリトヴィアンといえば、ルル解放運動の陣頭に立っている連中だ。およそ一千年間も彼らはそのために努力している。だから、おまえの伝言がルルに関するものである公算は非常に高いのだ」

「ああ　　そういうことか。でもサン・セヴェリナは、見ることも想像することもできないようなことでも知ってるみたいだよ」

エルマーはジョーに、もっとそばに来い、と身振りでいった。「一人の人間が、六百八十億の人々を二十七人にしてしまう戦争に生き残るには、その人間は多くのことを知っているなければならない。だから、そんな人間がおまえやわしより少しばかりたくさん知っているからといって驚くのは、少々馬鹿げている。いや、馬鹿げているだけじゃなく、信じられないほどシンプレックスなことだ。さあ、仕事に戻れ、宇宙船ゴロ」

結局それをシンプレックスなことと認めねばならなくなって、ジョーは、ボイシュをひっくり返したりキブルポップをレネドックスしたりしに、穴を降りていった。夕食後ま

でルルに演奏を聞かしてやる必要はなかった。

二日後、ラッツホールに着陸した。サン・セヴェリナは、青空市場へ彼を買物に連れていき、光圧によって模様が変化する銀の刺繍入り黒ビロードの^{コントゥア}体形ケープを買ってやった。次に彼女は彼を^{ボディ・サロン}美容院に連れていった。旅の間に彼はほかの宇宙船ゴロと同様にすっかり汚れてしまっていたからだ。軽く彼の耳を引っぱり、彼女は白いうわっぱりを着た店主に彼を委ねた。「この子の身繕いをしてやってちょうだい」と彼女はいった。

「どういうふうにいたしましょう？」店主が訊く。

「まずは地球向きに、そして長旅向きに」

それが終わった時、彼の長い髪はもはやなく、鉤爪は短く切りとられ、歯から足の爪まですっかりきれいになっていた。「どう、気に入った？」彼の肩にケープを着せかけながら彼女が尋ねた。

ジョーは片手で短くなった黄色の髪の毛にさわった。「女の子みたいだ」眉をひそめる。そして指の爪を見た。「旅の途中でケパードには出会わしたくないな」そして再び鏡を見る。「でも、ケープはすごくいかしてる」

外に出てきたジョーの姿を一目見ると、ディクは眼をぼちぼちとさせてすっかり動転してしまった。そのためくすくす笑いが嵩じて、しゃっくりを起こしてしまい、輸出区画まで抱いて帰ってやらねばならず、しかもその間ずっと腹をかいてやったので、やっと彼も気を取り戻したのだった。

「また汚なくなるのは嫌だな」とサン・セヴェリナにいった。「でも汚ない仕事だからなあ」

サン・セヴェリナが笑った。「なんてかわいいシンプレックスな子なの！ あなたはこれから地球までわたしの被保護者として旅行するのよ」

「でもエルマーやロンはどうするの？」

「彼らはもう出発したわ。ルルを別の船に移してね」

ジョーは驚き、悲しみ、そして好奇心をもった。

「サン・セヴェリナ？」

「なあに？」

「どうしてあんたはおれにこんなにしてくれるの？」

彼女は彼の顔にキスし、なげやりなディクの角の突きを跳んでよけた。ジョーはまだ彼の腹をかいてやっていた。「それはあなたが美少年で、たいへん重要だからよ」

「ああ」とジョー。

「わかっているの？」

「いいや」彼らは船の方に歩いていった。

一週間後、彼らは岩がごろごろしている丘に立って、比較的小さな太陽の円盤がブルックリン橋の向こうに沈むのを見つめていた。ガイドブックにいまだイースト川^{リバー}と記されている、乾上がった黒い泥の溝を、水棲の細長いミミズが這い回っている。彼らの背後でジャングルがさらさらと音をたて、その”川”を横切って張られた蜘蛛の巣状のケーブルは、今にもブルックリンの白い砂地に橋自体を落としてしまいそうな様子だった。「故郷のより小さいな」とジョーがいった。「でも、すごく立派だ」

「がっかりしたようね」

「だけど、橋じゃないよ」とジョー。

「わたしがここであなたと別れなくてはならないから？」

「うーん……」彼は口ごもった。「おれはそうだといいたい。そうすればあんたが喜ぶと思うから。でもおれは嘘をつきたくない」

「真実はいつでもマルチプレックスなのよ」とサン・セヴェリナはいった。「それに、あなたはマルチプレックスに考える癖をつけなくてははいけないわ。あなたは今何を考えてるの？」

「今までみんながみんなすごく立派だとおれがいったのを覚えてる？ そして一度地球に行ったら、人々に立派なことを期待しなくなるとあんたがいったことも？ それがおれにはこわいんだ」

「わたしはまたそういう人たちよりも立派なものがあるともいったわ」

「でもどんな生命体と比べても人間は聡明な存在のはずだ。あんたはそう教えてくれた。人間がそうでないんなら、ほかにどんなものがあるんだい？」突然彼は彼女の手をつかんだ。「あんたはおれをひとりぼっちでほっぽり出すんだ、もう二度と会えないかもしれないのに！」

「その通りよ」彼女はいった。「でも、何もなしであなたを宇宙にほうり出すわけじゃないわ。だからあなたにちょっとした助言をあげましょう。<でかぶつ>を捜しなさい」

「えっ……いったいどこを捜せばいいの？」再び彼は当惑した。

「あまりに大きすぎて地球にはやってこれないのよ。前に会ったところは月だったわ。それは冒険を待っているの。あなたならその待っているものになれるかもしれない。あなたもきっとそれを気に入ると思うわ。いつもわたしの大のお気に入りだったんだから」

「人間ではないの？」

「そう。だから、わたしは助言してあげたの。もう行くわね。することが残っているし、そのうちあなたもわたしの感じている痛みのこともわかるようになるわ」

「サン・セヴェリナ！」

彼女は次の言葉を待った。

「ラッツホールでのあの日、おれたちが買物に行って、あんたが笑いながらおれのことをかわいいシンプレックスな子といった　あの時、あんたは幸せだった？」

ほほえみながら、彼女は首を横に振った。「ルルはいつもわたしといっしょにいるわ。もう行かなくては」

彼女が後ろにさがると、木の葉が彼女の銀色の唇、ドレス、そして指先に軽く触れた。そして、ルルを所有することの信じられないほどの悲しみを担って、彼女は彼に背を向けた。ジョーは彼女を見送り、それから振り返って、陽光の最後の残滓が砂地から消えていくのを見つめた。

第8章

彼が輸送ターミナルに戻ったのは夜になってからだった。地球は一大観光地なので、光り輝く天井の下にはいつも人々がたむろしている。月へ行く方法を考えもせず、ただ好奇心を満たすために、ぶらぶらと歩き回っていると、でっぴりと太った、身なりのいい紳士が彼に話しかけてきた。「ちょっと、そこのお若い人、きみは今暇そうだね？ 船を待ってるのかね？」

「いや」とジョーはいった。

「今日の午後、ここできみがあの魅力的な御婦人といっしょにいるのを見かけたものでね、夕方には是が非でも出会いたいものだと思っていたんだよ。わたしの名はオスカーだ」彼が手を差し出した。

「コメット・ジョー」とジョーはいつて握手をした。

「どこへ行くんだね？」

「月へ行きたいんだ。おれ、リスからヒッチハイクしてきたんだよ」

「おやおや。長かったろうな。何という船に乗っているんだね？」

「知らない。そううまくターミナルでただ乗れると思うかい？ 貨物船の発着場をあたってみる方がよさそうだな」

「なるほど、ただ乗りするつもりならね。だけど、アルフレッドがやってこなかったら、きみが彼の旅券を使っても多分かまわないだろうな。やっこさんはもう二隻も船に乗り損なっているからね。だいたい自分でもどうして彼を待ってここで立ち往生しているのかわからんよ。わたしたちがいっしょに行く計画を立てたということ以外には」

「月へかい？」

「その通り」

「そりゃあ、しめた」ジョーが顔を輝かせていった。「彼がこなければいいんだが」

彼はいいよんだ。「これはシンプレックスな考え方だよな？」

「真実はいつでもマルチプレックスだよ」とオスカーがいった。

「そう。彼女もそういった」

「昼間きみといた御婦人のことかね？」

ジョーは頷いた。

「ところで、彼女は誰なのかね？」

「サン・セヴェリナだよ」

「その名前は聞いたことがあるな。銀河系のこんな渦状肢で彼女は何をしているのかね？」

「ルルを少し買ったんだよ。彼女にはしなくちゃいけない仕事があったから」

「ルルを買ったって、ええ？　ところが彼女はきみに旅券代としてびた一文渡さなかったというのかね？　月旅行料金の百五十クレジットぐらいはどのようにでも融通できると誰しも思うのに」

「いや、彼女はとても気前のいい人だよ」とジョー。「それに彼女はルルを買ったんだから、彼女のことを悪くってはいけないんだ。彼らを所有することは、とてもとても悲しいことなんだから」

「わたしがルルを買えるほどの金を持っていたとしても」とオスカー。「どうということはない、そう、何もわたしを悲しませはしない。ルルを少しだって？　いったい彼女は何匹買ったんだね？」

「七匹さ」

オスカーが額に手をあてて、ヒューと口笛を鳴らした。「しかもその値段は等比級数的に増加する！　二匹買うには、一匹を買う四倍の金がかかるのは知ってるだろう。それでも彼女はびた一文くれなかったんだね？」

ジョーは再び頷いた。

「信じられん。そんな話は今まで聞いたことがない。彼女がどれほど途方もなく富裕でなければならぬか、きみにもわかるだろう？」

ジョーは首を横に振った。

「きみはあまり聡明ではないんだね？」

「おれがどれだけかかるのか訊かなかったから、彼女も教えなかったんだ。おれは彼女の船の単なる宇宙船ゴロだったんだからね」

「宇宙船ゴロ？　刺激的な響きがあるね。わたしもきみぐらいの歳には、いつもそんなことをしてみたいと思っていたんだ。だが、度胸がなかったんだな」でっぴりと太った男は、突然落ち着かなげな表情を浮かべてターミナル内を見回した。「ああ、アルフレッドはやってきそうもないな。彼の旅券を使いなさい。受付に行って要求すればいいだけだから」

「でもおれはアルフレッドの身分証明をするようなものは何も持っていないんだよ」とジョー。

「アルフレッドは身分証明書など持っていたためしがない。いつでも財布やそんな類たぐいのものを失くしてしまうんだよ。わたしが彼の予約をとってやる時はいつでも、彼が何ら身分証明に相当するものを持っていないことを条件にしている。だから、きみはただアルフレッド・A・ダグラスだといえればいい。それで旅券はもらえるから。さあ、急いで」

「うん、わかった」彼は人々の間を通り抜けて、事務員のところに行った。

「すみません」と彼はいった。「A・ダグラスの旅券はありますか？」

受付の事務員はひとわり名簿に目を通した。「ええ。ちゃんと載ってますよ」ジョーに向かってにやりと笑う。「地球では相当お楽しみなさったようですね」

「はあ？」

「この旅券は三日もあなたを待っていたんですよ」

「ああ」とジョー。「いや、ちょっとごたごたがあつてね、それが治まるまで両親に会いたくなかったんだよ」

事務員は頷き、片眼をつぶってみせた。「これがあなたの旅券です」

「ありがとう」そういって、ジョーはオスカーのところに戻った。

「次の便はちょうど今乗船中だ」オスカーがいった。「さあ、行こう。やっこさんは別の方法で来るしかないだろうよ」

船上でジョーは尋ねた。「<でかぶつ>がまだ月にいるか知ってる？」

「そう願いたいね。わたしの聞いたところでは、彼はどこにも行かないらしいし」

「見つけるのは難しいと思うかい？」

「そうは思わないね。それにしても窓の外は美しい眺めではないかね？」

月のターミナルから出た時も、オスカーはまた別の卑狼な話を事細かに喋っていた。頭上マイルのところを円弧を描いているプラスチックドームを、陽光が三日月形に明るく縁どっている。彼らの右手では月の山脈が大きく湾曲しており、背後には緑色のポーカーチップのような地球が天にかかっている。

突如、誰かが叫んだ。「あそこにいるぞ！」

女性が悲鳴をあげ、後じさりした。

「つかまえる！」別の誰かが叫ぶ。

「いったいぜん……」オスカーがまくしたてようとした。

ジョーはあたりを見回し、習慣的に左手をあげた。だが鉤爪はない。連中は四人一人は後ろ、一人は前、そして両横に一人ずつ。身をかわたはずみに、オスカーにどんと突きあたる。

するとオスカーはバラバラになってしまった。その破片が、彼の足の周りをぐるぐると回っている。

周りを見回すと、ほかの四人の男も爆発した。そのぶんぶんとうるさく飛び回る破片は、彼の周りを回って取り囲み、その包囲を狭め、他の下船者たちの当惑した顔をぼやかした。と、突然その全部が合体し、彼は恐ろしい暗黒の中に閉じ込められた。意気沮喪しかけた寸前、彼に一条の光明が差し込んできた。

「ボシー！」誰かが甲高い声をあげた。「ボシー……！」

ジョーはひどく小さな部屋のバブル・チェアに降ろされた。その部屋は動いているように思えたが、はっきりそうとはいいきれなかった。もとオスカーだった声があった。「エイプリル・フルだ。驚いたかね」

「くそっ！」^{ジャップ}ジョーは叫んで立ちあがった。「いったいどうなってんだ どうなってるんだ？」

「エイプリル・フルだ」その声は繰り返していった。「わたしの誕生日でもある。きみは混乱しているようだな。でもすっかり度胆を抜かれただけではないんだろ？」

「死ぬほどこわかったぞ。これはどういうことだ？ おまえは誰なんだ？」

「わたしは<^{ランプ}でかぶつ>」と<^{ランプ}でかぶつ>がいった。「きみは知ってると思ってたんだがな」

「何を知ってるって？」

「オスカーやアルフレッドやボシーなんかの役割をだよ*¹。ともに楽しんでくれているものと思っていた」

「何を楽しめっていうんだ？ おれはどこにいるんだ？」

「もちろん、月だよ。きみがここに来るのにそれが賢明な方法だと思ったんでね。サン・セヴェリナはきみの料金を払ってくれなかつた。彼女はわたしがしてくれるだろうと考えたのだ。それで、わたしがその勘定をたてかえたんだから、少しは楽しませてもらわなければ割に合わない。ぴんどこなかつたかね？」

「何が来るって？」

「ただの言い回しだよ。よくやることなんだ」

「そうかい、次回は気をつけておくよ。ところで、きみは何者なんだ？」

「^{リングスティック・ユーピキタス}どこにでも存在する言語マルチ・プレックスだ。きみにとっては<^{ランプ}でかぶつ>だよ」

「一種のコンピュータなの？」

「うーむ。まあ、そんなところだな」

「それで、これからどうなるんだい？」

「きみはわたしに相談するだろう」と<^{ランプ}でかぶつ>。「そしてわたしが手助けをする」

「おお」とジョー。

*¹ オスカー・ワイルドはアルフレッド・ダグラスと有名な男色事件を起こした。ボシーはダグラスの愛称。

バブル・チェアの後ろからくすくす笑いがして、ディクが姿を見せ、ジョーの前に坐ると、非難するように彼を見た。

「おれをどこへ連れて行ってるんだい？」

「わたしの中央コンソールへだ。そこで休養しながら計画を立てればよい。坐ってくつろいだらどうかね。三、四分もすれば着くから」

ジョーは坐り直した。が、くつろげなかった。それで、オカリナを取り出し、前面の壁にドアが開くまで吹き続けた。

「さあさあ、到着だ、その日のうちに帰れるとはね」と^{ランプ}<でかぶつ>がいった。「入ってくれないか？」

第9章

「おれは」 コンソールにケーブルを投げつける 「こうしちゃ」 ガラス壁に小物袋を投げつける 「いられないんだ！」最後はディクへの飛び蹴り。だが、ディクが身をかわしたので、ジョーは危うく転びそうになった。

「誰がきみの邪魔をしているんだね？」<でかぶつ>が尋ねた。

「くそっ、きみじゃないか」ジョーが捻った。「なあ、おれはもうここに三週間もいるんだぜ。きみは、おれが出て行こうとするたびに、あのえんえん九時間もの馬鹿馬鹿しい話し合いをして、それですっかりおれをくたびれさせてしまうんだ」彼は広間を横切ってケーブルを拾いあげた。「その通り、おれはまぬけだよ。でも、どうしてきみはそんなことを繰り返して楽しむんだ？ おれは未開惑星出身のノープレックスなんだから、仕方がないこと 」

「きみはノープレックスじゃない」と<でかぶつ>。「きみのものの見方はもう完全なコンプレックスだ 古いシンプルプレックス観に対するわからなくもないノスタルジアを、まだたくさん抱えてはいるがね。時々きみはそれを議論にも持ち出そうとする。あの ”見かけ上の現在*1” の理解を阻んでいる心理要因をわれわれが議論していた時も、きみが頑固に 」

「いや、ちがう、きみは間違ってる！」とジョー。「おれは別のものになるつもりなどないんだ」

そのとき彼は広間の反対側に転がった小物袋を拾っていた。「おれは出て行く。ディク、行こうぜ」

「きみは」と普通より威厳をこめて<でかぶつ>がいった。「愚かになりつつある」

「そう、おれはシンプルプレックスだ。今でもそのままなのさ」

「知識とプレックスに相関関係はない」

「きみが四日間かけて動かし方を教えてくれた宇宙船もある」ジョーはガラス壁の向こうを指さしていった。「おれがここにきたその晩に、催眠記憶でおれの頭ん中に道筋も植

*1 ある人にとっての現在が、他人にとっては過去ともなりうるような、各自の主観的現在。

えつけてくれている。いったいぜんたい何がおれを止めているというんだ？」

「何もきみを止めてはいない」と<でかぶつ>が答えた。「だから、そういう考えを念頭から追い出せば、きみは落ち着いてこのことをじっくりと考えられるのに」

腹をたてたジョーは、チェック・ランプやプログラム・修正用キイボードが点滅する、六十フィートものマイクロリンクやロジック・ブロックの壁に面と向かった。「<でかぶつ>、おれはここが好きだ。きみは友だちとしては偉大だ、実際、そうなんだ。しかも、食い物も運動も全部与えられている。だけど、おれは気が狂いそうなんだ。このままきみを残して出て行くのがたやすいことだとも思ってるのかい？」

「そう感情的になりなさんな」と<でかぶつ>。「わたしはその手の処理向きに作られていないんだから」

「宇宙船ゴロをやめてから、今までの人生のどの時期よりも、おれが仕事をしていないことをきみは知ってるかい？」

「きみはまたどの時期よりも変わったのだ」

「なあ、<でかぶつ>、わかろうとしてくれよ」彼はケーブルを落としてコンソールに戻った。それはマホガニー製の大型機だった。彼は椅子を引き出すと、その下に這い込み、膝を抱いた。「<でかぶつ>、きみが理解しているとは思わない。だから、聞いてくれ。きみはここにいながらにして、銀河系のこの渦状肢中のすべての図書館や博物館とつながっている。きみにはまたたくさんの友人もいる、サン・セヴェリナのような人やいつもきみのところに立ち寄っていく人たちだ。きみは本を書き、音楽を作り、絵を描く。だけど、図書館もないし、テレシアターも一軒だけで、土曜日の晩に酔っ払う以外にすることがなく、四人ほどしか大学に行ったことのある者はおらず、金儲けにあくせくしてきみが会うこともないような人々がいて、誰もが誰の仕事のことも知っている、そんな小さな単一生産社会にいたら、きみは幸せでいられたと思うかい？」

「いや」

「でもおれはそうだったんだよ、<でかぶつ>」

「では、どうしてきみは出てきたんだ？」

「そりゃあ、伝言のせいで、それにおれの知らないものがたくさんあると思ったからだ。おれに出て行く用意ができていたとは思わないがね。とにかく、そこじゃきみは幸せではいられない。だがおれはいられた。ことはそれほど単純だけど、きみが十分に理解しているとはとても思えないんだ」

「わたしはしているよ」と<でかぶつ>。「きみがそういうところで幸せであってくれたらと思う。なぜなら宇宙はほとんどそんなところばかりだからだ。きみはそういうところで人生の大半を過ごすことになっていたのだから、そこを楽しめなかったら、むしろ悲し

いことになっただろう」

ディクが机の下を覗き込み、ジョーの膝に飛びのってきた。机の下は常時十度も暖かく、温血動物のディクとジョーにとっては、別々であれいっしょであれ、何度となく潜り込んだ素敵な場所なのである。

「今度はきみが聞く番だ」<でかぶつ>がいった。

ジョーは机の側面に頭をもたせかけた。ディクが膝から飛び出していき、すぐにプラスチック製の小物袋を引きずって戻ってきた。ジョーはそれを開けてオカリナを取り出した。

「わたしのいいたいことは、もうほとんどきみに話している。だがきみにはわたしに尋ねることがあるはずだ。きみはまだほとんど質問していないからね。きみがわたしのことを知っているよりもずっと、わたしはきみのことを知っている。そしてわれわれが友人ならそれはきみにとってもわたしにとっても非常に大切なことだ。こういう状態は改めるべきなのだ」

ジョーはオカリナを降ろした。「その通りだー<でかぶつ>、おれはきみのことを知らなすぎる。きみはどこ出身なんだい？」

「わたしは、瀕死のルルがその遊離していく意識を収納するために作ったものなのだ」

「ルルだって？」ジョーが訊く。

「彼らのことを忘れかけていたのかね？」

「いや、そうじゃない」

「つまり、わたしの意識はルルの意識なんだ」

「だけどきみはおれを悲しくさせないぜ」

「わたしは半分ルルで半分機械だ。だから保護はされていないのだ」

「きみがルルだって？」ジョーは信じられないとでもいうように再び訊いた。「全然思いもしなかったなあ。でもそれをおれにいったからといって、それでどういう違いがあるというんだい？」

「まあ、そういうことだな」と<でかぶつ>。「だが、きみがきみの親友のことをいいだしたら、わたしはきみを尊敬しはしないからね」

「おれの親友がどうしたって？」とジョー。

「また別の言い回しだよ。わからなくてもいいんだ」

「<でかぶつ>、どうしておれたちはいっしょに行かないんだい？」突然ジョーがいいだした。

「おれは出発するそう決心したんだ。どうしていっしょに来ないんだ？」

「いい考えだ。きみがそういうとは思っていなかった。とにかく、それがここから出て

行く唯一の方法なのだ。むろんわれわれの向かう星域はルルの解放にひどく敵対的だ。そこはもう帝国の直轄領なのだから。彼らはルルを保護しており、その保護に背を向けて、ひとり自由のままにしようとすると、彼らにかなりの動揺を引き起こす。彼らのすることには相当むごいものがあるという話だからね」

「じゃあ、訊いてくるやつがいたら、きみはただのコンピュータだといえればいいさ。だって、おれもきみがいわなければわからなかったもの」

「わたしはいうつもりなどない」<でかぶつ>がきっぱりといった。

「なら、きみはコンピュータだとおれがいうてやるよ。さあ出かけようや。こんなことしてたら、何時間もここにいなくちゃならない。また議論を始めてみたいだからな」彼は机の下から出て、ドアに向かった。

「コメント？」

ジョーは立ち止まり、肩ごしに振り返った。「何だい？　まさか気が変わったというんじゃないだろうね？」

「いや、ちがうよ。もちろんわたしは行くつもりだ。だが……つまり、わたしが　正直にいおう　通りをのそのそと歩いてたら、『おや、どこにでも存在する言語マルチプレックスがあそこを歩いている』と人々は本当にいうと思うかい？　そしてルルだとは思わないだろうか？」

「おれが何かいうとしたら、そういうだろうな」

「わかった。ジャーナル広場まで^{スクエア}輸送流^{チューブ}に乗って行けばいい。そこで四十分後に会おう」亀裂が走った月面の塵埃平原を卵形宇宙船に向かって走るジョーの後を、ディクは八本足で追いかけていった。

^{チューブ}輸送流とは冥王星の彼方までたちまちのうちに船を運んでいく人工の^{ステイシス・カレント}静止空間流のことである。そこまで行けば濃密な^{ソラー・ダスト}太陽系塵による損傷を恐れずに太陽系を後にできるわけだ。

そこには、各辺約十マイルの巨大なプラスチック厚板があり、その上には建物と大気と、そしていくつかの娯楽区域が設けられていた。ジョーは船を横町に停め、冷え冷えとした大気の中に踏み出た。

広場では兵士たちが隊形訓練を行っていた。

「何であんなことをしているんだい？」近くで休憩している制服姿の男に尋ねてみた。

「あれは帝国軍の野戦旅団だ。二、三日中には出ていくよ。ここには長くないから」

「おれは別に文句をいってるわけじゃない」とジョー。「ただ興味があるだけなのさ」

「そうかい」とその兵士はただで、それ以上何もいってくれなかった。

「どこへ行くんだい？」しばらくしてジョーが訊いた、

「あのな」しつこい子供を相手にするように、兵士はジョーの方を向いていった。「帝国軍のことは、じかに見れること以外すべて秘密なんだ。連中がどこへ行こうとおまえには関係ないんだから、そんなことは忘れちまいな。もし関係あるというんなら、ナクター王子に許可をもらってからにしてくれ」

「ナクターって？」ジョーが訊く。

「あの人だ」兵士は歩兵小隊を指揮している色の黒い山羊髭の男を指さした。

「おれにはあまり関係ないんだよ」とジョー。

兵士は愛想つかしの視線を送ると、立ち上がり、歩き去った。黒のケープが男たちのきびきびした方向転換に合わせて翻る。

そのとき見物人の間にどよめきが起こった。空を見上げ、指をさし、興奮して喋り始める。

広場に向かってきりもみ降下してくるそれは、太陽を覆い隠し、次第に大きくなっていった。それはほぼ立方体と違ってよく、しかも 巨大であった！ 一つの面が見えると別の面が見えなくなる。突然ジョーはそいつの大きさを知った。各辺がゆうに四分の一マイルはあったのだ。

それは広場にぶちあたり、ジョーや兵隊たちを、そして高い建物を一つなぎ倒した。大混乱が起こり、サイレンが鳴り響き、人々がその物体の周りで右往左往した。

ジョーはその方に駆け出した。低重力のおかげでかなり速くそこにたどり着けた。その区域を中心に、広場には大きな裂け目が数本走っている。その一本を跳び越えた時には、下に星が見えた。

息をのんで反対側に降りると、少し歩調を緩めた。その物体は煮えくり返るある種のゼリーで覆われていた。そのゼリーにはどこか見覚えがあるように思えたが、どこでかはわからなかった。その暖かな湯気をあげている泥水をすかして、彼の方に向いた物体の面がガラスでできているのが見分けられた。そしてその奥に、冥王星の薄明かりにぼんやりと、マイクロリンクやロジック・ブロックが、チェック・ランプのかすかなきらめきが見える。

「<でかぶつ>！」ジョーは前に走り出しながら叫んだ。

「しいいっ」ゼリーに押し殺されだなじみのある声が聞こえてきた。「わたしは注意をひかないようにしているんだ」

今ではもう兵士たちが近づいてきていた。「とにかく、いったいあいつは何なんだい？」と一人がいった。

「あれはどこにでも存在する言語マルチブックスだ」と別の兵士が答えた。

尋ねた兵士は頭をかきながら、その壁の大きさをじろじろと眺めた。「地獄みたいどこにでも存在するってんだな？」

三人目の兵士は広場の裂け目を調べていた。「こいつを直すにはあのくそつたれのルルを使わなくちゃならんと思うかい？」

<でかぶつ>が小声でいった。「連中の一人にわたしに面と向かって何かいってみるといってやってくれ。一人だけでいい」

「ああ、黙って」とジョー。「でないとおれの娘と結婚させないぞ」

「それがどういう意味か知ってるのかね？」

「単なる言い回しさ」とジョー。「先週きみが居眠りしてる間に少し読書したんだよ」

「おもしろい、非常におもしろい」と<でかぶつ>。

兵士たちが立ち去り始めた。「ルルなんて手に入るもんか」とその一人が耳をかきながらいった。「これは兵隊の仕事だよ。とにかくおれたちが全部直して回らなくちゃならんのさ。だけど、近くにくそつたれのルルでもいたらなあ」

<でかぶつ>のチェック・ランプがいくつかゼリーの奥で色を変えた。

「いったいきみを覆ってるそれは何なんだい？」ジョーが後ろにさがりながら尋ねた。

「わたしの宇宙船だよ」と<でかぶつ>。「有機^{オーガニフォーム}宇宙船を使っているんだ。わたしのよう生命のないものにとっては、すごく快適なものなんだよ。今までにこういうものを見たことはないのかね？」

「そう　いや！　リスであった。それでトリトヴィアンやら何やかやがやってきたんだ」

「おかしいな」と<でかぶつ>。「彼らは普通^{オーガニフォーム}有機宇宙船を使わないんだがな。特に生命がないというわけではないんだからね」

コンピュータの周りには大ぜいの人々が集まってきていた。サイレンも近づいてくる。

「ここから出よう」ジョーがいった。「きみは大丈夫なのかい？」

「大丈夫だ」と<でかぶつ>。「ただ広場の方が心配だな」

「血まみれだけど降参はしていない」とジョー。「これも言い回しだよ。先に行ってくれ、タンタマウントで会おう」

「わかった」と<でかぶつ>。「後ろへさがってくれ。離陸する」

ぶつぶつという音、そしてすさまじい咬い込み、ジョーが風の中でよろめく。再び人々が叫び声をあげた。

場面は変わってジョーの船。ディクが前足で頭をおさえて、ダッシュボードの下に隠れている。

エジョーが離陸ボタンを押すと、ロボ乗組員があとを引き継いだ。広場の混乱が眼下に

なる。^{ハイバーステイス}超静止空間状態に目を通し、そして彼は^{ジャンプ}跳躍の合図を送った。

^{ステイス・ジェネレーター}静止空間発生機が捻り、船が^{ハイバーステイス}超静止空間に滑り込み始めた。ところが、滑り込みを終える前に、船は急に傾き、彼は激しくダッシュボードに叩きつけられた。手首が衝撃を受け、はずみをくらって彼はふっとぶ。デッキが金切り声をあげる。

「進行方向に気をつけていなさい」スピーカーから声がした。

第 10 章

ジョーは下唇に食い込んだ犬歯を引きはがした。

「きみはチェスをやらないのかね」声が続く。「わたしの駒の上に駒を置いたら、わたしのは盤面から出るに出不れなないじゃないか。以後、気をつけなさい」

「うううーん」ジョーが口をこすりながら捻った。

「誰に対してもだよ」

ジョーは頭を振り、感知ヘルメットをかぶった。古いジャップのような匂い。水圧機に押しつぶされる金屑のような音。だが見た目には美しかった。

傾斜路が、花のように開いた建物に弧を描いて続いている。細い金属の尖塔がその天辺に突き出しており、もろそうな監視ドームが細い鉄柱に支えられている。

「外に出てわれわれに与えた損傷を調べてくれたまえ」

「ああ」ジョーはいった。「わかった。確かに」

エアロックに行き、それを開けようとした時、警告灯が点いたままなのに彼は気付いた。「おい」彼はインターコムで呼びたてた。「外には空気がないぞ」

「きみが用意するものどばかり思っていた」と声が答えた。「ちょっと待ちたまえ」警告灯が消える。

「ありがとう」そういって、ジョーは開閉レバーを引いた。「ところで、きみは何者なんだい？」

エアロックの外では、白いうわっぱりを着た禿げかけの男が、傾斜路を降りてきていた。「きみが衝突しかけたのは、ジオデシック・サーヴェイ 測量調査ステーションだよ、お若いの」本人の生なまの声はひどく小さかった。「この空気が漏れ出してしまう前に、力場の中に入った方がいい。とにかくいっただいきみはどういうつもりだったのかね？」

「ステイシス・ジャンプ 静止空間跳躍をしかけていたんだよ、タンタマウントに向かって。おれシンプレックスだったかな？」男は肩をすくめ、ジョーを連れて傾斜路を戻り始めた。

「わたしはそういう判断はしないんだ」と男がいった。「それよりきみの専門をいいなさい」

「おれにはそんなものはない、こともないな」

男が眉をひそめた。「^{シンセサイザー}総合家は今すぐには必要としていない。彼らはきわめて長命だからな」

「ブライアジルの栽培と貯蔵のことなら、おれは何でも知ってるんだけど」とジョー。

男はほほえんだ。「あまり必要ではないな。今は Bba から Bbaab までの百六十七項目を一冊にまとめているところなんでね」

「一般的な言葉でいえばジャップ (jhup) というんだ」とジョー。

男は優しく彼にほほえんだ。「Jh ならまだまだずっと先のことだ。きみがあと五、六百年生きているんなら、きみの申し出を採用できるんだがね」

「ありがとう」ジョーはいった。「でもおれの方が忘れちまってるよ」

「それはよかった」男が彼を振り返っていった。「さようなら」

「それで、おれの船の方の損傷はどうなんだ？ きみは調べさせてくれないのかい？ だいいち、きみがこんなところにいるなんて知らなかったんだから。おれはこの進路上に障害がないことを調べていたんだぜ」

「若者よ」とその紳士はいった。「まず第一に、われわれには優先権がある。第二に、きみは仕事を欲しがっているのでなければ、われわれの空気を無駄使いしてわれわれの親切を乱用してる。そして第三に、われわれは^{バイオロジ}生物学、人間の項目で扱う事前研究に着手しているきみがこれ以上わたしの手を煩わすのなら、わたしはきみを標本として細かく切り刻むからな。まさかとは思うなよ」

「おれの伝言はどうなるんだ？」ジョーはいつた。「おれはルルに関する伝言をエンパイア・スターに持っていかなくちゃならない。しかもそれは重要なんだ。だからこそ、こうしてきみにぶつかることになったんだ」

男の顔に敵意があらわれた。

「結局」彼は平静にいった。「われわれがわれわれの計画をやり遂げれば、その十分な知識から、建設はルルがいなくてもすませられるようになり、ルルは経済上非実用的となることだろう。きみがルルに^{くみ}与したいんなら、わたしは即刻きみを分断してやる。父は今ア^{バイカスピッド}デノイドを研究しているし、^{バイカスピッド}二頭歯にも研究の余地が多分にある。われわれは最近^{コロ}結腸にとりかかったばかりで、^{デュオダイナム}十二指腸はいまだまったく謎のままという状況だ。きみが伝言を伝えたいのなら、ここで伝えればいい」

「でもおれはそれが何なのか知らないんだ！」そういいながらジョーは^{きわ}力場の際に後じさった。

「おれはもう行った方がよさそうだ」

「きみのようなそういう問題のためにコンピュータがあるのだ」と男。「やめろ、われわれの空気を肺いっぱい吸い込むな」そういって、ジョーに向かって突進してきた。

ジョーがその突進を簡単にかわす。

力場は通行可能で、彼は頭をさげて通り抜けた。船のエアロックに飛び込むと同時に、ドアをぴしゃりと閉ざす。警告灯が一秒とたためうちに点灯する。

彼は船を逆進にし、自動パイロットが今なお静止空間流をうまく制御し、さらに深い^{ステイシス}静止空間レベルまで移行できるよう願った。少々荒っぽかったが、うまくいった。測量調査ステーションが、ダッシュボードの正面に置いた感知ヘルメットの^{ビュープレート}視覚板から次第に薄れていく。

タンタマウントの軌道上で^{ランブ}<でかぶつ>はたやすく見つかった。そこは氷結したメタンの惑星で、火山活動が激しく、地表には絶えず亀裂が走り、爆発を繰り返している。灼熱の白色倭星の一人娘であり、ここから眺めると、それが二つの眼のように見えた。一つは宝石のように輝き、もう一つは銀灰色で夜闇をうかがっている。

「^{ランブ}<でかぶつ>、おれは故郷に帰りたい。リスに戻って、すべてを忘れちみたい」

「いったいどうして？」コンピュータの疑うような声がインターコムごしに聞こえてきた。ジョーは肘をついて、むっつりとオカリナを眺めている。

「マルチプレックス宇宙が気に入らないんだ。好きになれないんだ。だからおれはそれから逃げ出したい。今おれがコンプレックスなのなら、あまりにひどい、間違ってる。リスに戻ったら、シンプレックスになろうと一生懸命にやってみるつもりだ。本当にそうするつもりなんだから」

「いったいどうしたんだね？」

「おれはただ人々が好きになれないんだ。そんなに単純なことなのさ。きみは測量調査ステーションのことを聞いたことがあるかい？」

「ああ、知っている。彼らに会ったのかね？」

「そう」

「それは不運だったな。そう、マルチプレックス宇宙には処理しなければならない悲しいことがあるんだよ。その一つがシンプレックスなのだ」

「シンプレックスが？」ジョーが訊いた。「どういう意味で？」

「きみがマルチプレックスのヴィジョンを相当会得していたことに感謝するんだね。そうでなかったら、とうていきみは生きて彼らから脱れられなかったろう。わたしはシンプレックスな生物が彼らに会わした話を聞いたことがある。彼らは戻ってこなかった」

「彼らもシンプレックスなのか？」

「おお、そうだよ。わからなかったのかね？」

「だけど彼らはあらゆる知識を編纂している。それに彼らの住んでいるところはi美し

い。彼らが愚かなはずがない、それを造ったんだから」

「まず第一に、ほとんどの測量調査ステーションはルルが造ったものだ。第二に、今までに何度もいったように、知性とプレックスは必ずしも同じものではない」

「でもどうやったらそれが判断できるんだ？」

「その証拠をあげてもきみの気分を害することはなかろう。彼らはきみに一つでも質問をしたかね？」

「いや」

「それがまず一つの証拠だ、決定的なものではないがね。彼らのいったことから考えて、彼らはきみを正しく判断していたかね？」

「いや。彼らはおれが仕事を捜していると思っていた」

「ということは、彼らは質問をすべきだったということだ。マルチプレックス意識は質問の必要がある時は必ず質問をするのだから」

「思い出した」ジョーがオカリナを置いていった。「シャローナがそのことを説明しようとした時、彼女はこの世で一番大切なものは何かとおれに訊いた。彼らに同じことを訊いたとしたら、彼らがどう答えるかおれにはわかるような気がする。あのとんでもない辞書、それとも百科事典か、どうせそんなものだ」

「その通り。その質問に無関係な答えができる者は誰でもシンプレックスなのだ」

「おれはジャップと答えた」ジョーが懐しそうにいう。

「彼らは宇宙の全知識をカタログにしようとしている」

「それはジャップより大切なことだ、おれはそう思う」とジョー。

「コンプレックスな観点からでは、多分そうだろう。だが、マルチプレックスな観点からでは、どちらも似たようなものなのだ。だいいち、それはかなり困難な仕事だ。わたしが最後に聞いた時には、彼らはすでに B の項まで進んでいたから、きっと Aaaaaaaaaaaaaaaaaavdqx のことは記載していないはずだ」

「何だ……ええ、きみは何といったんだ？」

「これは、相対論的見地から力学モーメントを算出したま^ズ間違いのない決定的な数値のやや複雑な集合^{セット}の名称だ。わたしは数年前までその研究をしていた」

「そんな言葉は聞いたことがないな」

「わたしがつけたんだよ。しかしその意味するものはまったく本当のことなんだし、充分一項目をさく価値はある。彼らにそれが理解できるとは思えないがね。だがこれからは、それに対して Aaaaaaaaaaaaaaaaaavdqx の名をわたしは使うし、今やわれわれ二人がその言葉を知っているわけだから、それは有効なのだ」

「当は得ているようだ」

「それに、あらゆる知識を、しかもすぐに利用できる知識をもカタログにしてしまうのは……そう、それにふさわしい唯一の言葉はシンプレックスなのだ」

「どうして？」

「誰でも必要なことを知ることができるし、誰でも知りたいことを知ることができる。しかし、誰もが知りたいことすべてを知る必要は、それが測量調査ステーションのやっていることなんだが、結局意味がなく、まとまりを欠くことになる。ところできみの船はどうしたんだね？」

「これも測量調査ステーションさ。衝突したんだ」

「あまりよい状態じゃないな」

「離陸が少しばかり荒っぽかったんだよ」

「まったくもってよい状態とはいえないな。特にわれわれがどれほど遠くまで行かなければならないかを考えると。どうだい、こちらに乗り移っていっしょに旅をするというのは？ この有機宇宙船オーガニフォームは美しいし、わたしも離着陸時にはもう少しうまく操船するから」

「着陸時におれの背骨を折らないと約束するならね」

「約束する」と＜でかぶつ＞はいった。「わたしがきみに追いつくから、きみは船を左旋回させなさい。そうすればそのおんぼろ船をそのままの位置においておける」

船が接触した。

「ジョー」柔軟な管がエアロックに接続されると、＜でかぶつ＞はいった。「きみが本当に帰りたいのなら、まだ帰ることはできる。しかし、戻ることが進むことより難しい地点に来ているのも確かだ。きみは特殊な教育を相当受けている。サン・セヴェリナやわたしが教えたものだけでなく、きみはリスでも学んでいたのだ」

ジョーは管状通路に踏み込んだ。「おれは今でも故郷に帰りたい」コンソール・ルームに向かう歩度が遅くなる。「＜でかぶつ＞、たとえきみがシンプレックスであったとしても、きみは時々自分自身に向かって、わたしは誰か？ と問うてみるんだらうな。わかっている、測量調査ステーションがシンプレックスだといってくれるのは。それで少しは気が安まるがね。でも、おれは今だにジャップ農場に戻って、野性のケパードと闘いたがってごく普通の子供なんだよ。それがおれなんだ。それがおれの知ってることなんだ」

「たとえ帰ったとしても、きみは周りの人々を測量調査ステーションの連中と同じように感じるのだらう。きみは故郷を去ったのだよ、ジョー、なぜならきみは幸せじゃなかったからだ。そうじゃないのかね？」

ジョーはコンソール・ルームまでやってきたが、そこで立ち止まり、両手をドア枠にかけた。

「くそっ、その通りだ。ちゃんと覚えてるよ。おれは違ってると思ってたんだ。だから、

伝言がやってきた時、それがおれの特異性の証左だと思ったんだ。ほかには何もなかったからな。わかるまいさ、<でかぶつ>」 ドア枠に手をがけたまま前に身をのりだす

「おれが実際に特異だと知ってたなら 確信してたかどうかのことだ おれは調査ステーションなんにかそれほど驚かなかったさ！ でもおれは人生の大半を徒費し、不幸せで、また平凡でもあったようだ」

「きみはきみだよ、ジョー。きみはきみであり、きみが黙考したい時に何時間も坐ってディスクを見つめる癖から、赤いものより青いものに十分の一秒速く反応する癖まで、きみのしたすべてでもある。きみはきみがかつて考えたすべてであり、きみの望んだすべてでも、そしてきみの憎んだすべてでもあるんだ。そしてきみの学んだすべてでも。きみは多くのことを学んでいるからね、ジョー」

「でも、それがおれのものだと知っていたらの話だよ、<でかぶつ>。それがおれの確信したいことなんだ。つまり、伝言が本当に重要なものなのか、そしておれがそれを届けることのできる唯一の人間なのか、ということが。おれが受けたこの教育が、おれをえーと、つまり、何か特別なものにすると実際に知ってたなら、このまま進んでもかまわなかつただろう。くそつ、おれは幸せでもあつただろうさ」

「ジョー、きみはきみなのだ。そしてそれはきみがそうありたがってるのと同様に大切なことなんだよ」

「多分それがこの世で一番大切なことなんだろうな、<でかぶつ>。その質問に答えがあるんなら、<でかぶつ>、それがそうなんだ、きみがきみ自身であつてほかの誰でもないと知ることが」

ちょうどジョーがコンソール・ルームに足を踏み入れた時、通信機のスピーカーがぶつぶつといいだした。ジョーがぐるりと見回すうちに、その音は大きくなった。「あれは何だい、<でかぶつ>？」

「わからない」

ドアが閉まり、管が離れ、壊れた宇宙船が漂い去っていく。有機気泡オーガニフォームに覆われたガラス壁を通してぼんやりと歪んだその姿を、ジョーはじっと見つめていた。

今度はスピーカーが笑っていた。

ディスクが一本の足で耳をかく。

「何かが向こうから近づいてくる」<でかぶつ>がいった。「しかもひどく速い」

笑い声が大きくなり、ついにヒステリーとなって、大きな部屋を満たした。その何かは、<でかぶつ>のガラス壁をかすめるように通り過ぎると、突如ぐるっと旋回し、すぐに二十フィート離れたところで停止した。

笑い声がやみ、ついで疲れたような喘ぎに変わる。

そいつは巨岩の破片のように見えた、ただ前面部だけは磨かれたように輝いている。タンタマウントの昼側に少しずつ漂っていくにつれて、白光がその表面から滑り落ち、ジョーはそれが透明な板ガラスであったことを知った。その奥には、両手両足を大きく広げた人影が身をのりだしている。ここからでも、その胸がコンソール・ルーム内で荒れ狂う喘ぎに合わせてもちあがるのがジョーには見てとれた、「<でかぶつ>、音量をさげてくれないか」

「おお、悪かった」耳の中でわんわんいていた喘ぎ声が遠ざかり、相当な距離をおいた穏当な音量に落ち着いた。「きみが彼に話しかけたいかね、それともわたしがしょうか？」

「きみがやってくれ」

「きみは誰だ？」と<でかぶつ>が尋ねた。

「ニ・タイ・リーだ。ちくしょう、こんなに興味をもたせるそっちこそ誰なんだ？」

「わたしは<でかぶつ>。きみのことは聞いたことがあるよ、ニ・タイ・リー」

「わたしはきみのことを聞いたことがない、<でかぶつ>。残念なことに。どうしてそう興味をもたせるんだ？」

ジョーが小声で訊く。「彼は誰なんだい？」

ランプ「しいいっ」と<でかぶつ>。「あとで教えるよ。きみは何をしていたんだね、ニ・タイ・リー？」

「わたしはあそこの太陽に向かって突っ込んでいながら、それを眺め、それがなんと美しいかと思い、そのあまりの美しさ故に笑い、それがわたしを破壊することになっているのにまた笑い、それでもなお美しいので、その太陽の美しさ、そしてそれを巡る惑星の美しさを詩に表わしていた。もっと興味をひくものを見つけるまで、つまりきみが誰なのかを知ることなんだが、そういうことをしていたんだ」

「じゃあ、こちらにきてもっと知ったらどうかね？」

「わたしはもう、きみがルルの意識を基にしたどこにでも存在する言語マルチ・プレックスなのを知っている」ニ・タイ・リーが答えた。「わたしがあの火の中に突っ込む前に、もっと知ることがあるかね？」

「わたしの船には、きみと同じくらいの歳で、きみの全然知らない少年が乗っているんだがね」

「それじゃ行こう。管を出してくれ」彼が前進し始めた。

「彼にはどうしてきみがルルだってわかったんだい？」岩の破片が近づいてくる間にジョーが訊く。

「わからない」と<でかぶつ>。「すぐにわかる者が何人かはいるんだ。だが、一時間も坐り込んで喋りまくり、質問もさせてくれない者よりはずっとまだよ。ただ彼にもわた

しがどのルルかはわからないはずだ」

管状通路が二の船に接続した。しばらくしてドアが開き、両の親指をポケットにかけて、ニ・タイ・リーが悠然と入ってくると、室内を見回した。

ジョーは今だにラッツホールでサン・セヴェリナに買ってもらった黒いケープを着ていた。逆に、ニ・タイ・リーは宇宙船ゴロそのものという風体だった。彼は裸足だった。シャツはなし、片膝のすりきれた作業ズボンは色褪せている。その長すぎる髪の毛はプラチナ・ブロンドで、耳や顔にかかっている。その顔は頬が高く張り出し、東洋的なつりあがったスレート色の眼をしていた。

その眼がジョーを凝視し、そしてにやりと笑った。「やあ」そうすると彼は近づいてきた。

彼の差し出した手とジョーは握手した。彼の右手の指には鉤爪があった。

ニが首をかしげた。「わたしはきみの顔をかすめた表情を詩に書くつもりだ。きみはリスの出身で、ジャップ農場で働いたり、栽培期のがり火のそばで横になったり、忍び込んできたケパードを殺したりしていたんだ」彼の閉じた口から、悲しそうでしかもおもしろがっているような音が小さく漏れる。「おい、<でかぶつ>。わたしはもう彼のことを全部知ったから出て行くよ」

彼は帰りかけた。

「きみはリスにいたのか？ きみは本当にリスにいたのか？」ジョーがいった。

ニが振り返る。「そう。いたことがある。三年前のことだ。宇宙船ゴロとしてそこに行った時に、しばらくの間第七農場で働いたんだ。そこでこれを手に入れたのさ」鉤爪を持ちあげる。

初めてルルに演奏してやった時以来感じたことのなかった痛みが、ジョーの喉の奥で脈うち始めた。「おれもちょうど栽培期の前に第七農場で働いていたんだ」

「ジェイムズ管理人は、あのどら息子に少しは知能を叩き込んだかい？わたしはたいいていの者とは何とかやっていたが、あの嫌な何でも知ってるぞといわんばかりのやつとは、四回も喧嘩するはめになったもんだ。しかも一度などやつを殺しかけたことがある」

「おれが……おれが殺^やっちまった」ジョーが小さな声でいった。

「おお」そうするとニは眼をしばたいた。「といいながらも、わたしは本当に驚いてはいないようだ」それでも、彼は昔を思い出しているふうだった。

「きみは本当にそこにいたんだ」とジョー。「おれの心を読んでるんじゃない」

「そこにいたよ。実際に。三週間半の間」

「あんまり長い間じゃないね」とジョー。

「長い間いたとはいわなかったよ」

「でもきみは実際にそこにいたんだ」ジョーが繰り返しいった。

「宇宙はそんなに大きくないんだ、友よ。きみの社会があれほどシンプルだったとはあまりにひどい、それでもきみたちにもっと知ることがあれば、もう少し長居しただろうがね」彼は再び帰りかけた。

「ちょっと待ってくれ」ジョーが叫んだ。「おれは……おれはきみと話す必要がある」

「本当かね？」

ジョーは頷いた。

ニ・タイが両手をポケットに戻す。「久しくわたしを必要とする者などいなかった。それは詩を書くのと同様おもしろいことのはずだ」コンソールに歩いていき、机の上に腰をおろした。

「だからしばらくはここにしよう。きみは何を話す必要があるんだね？」

ジョーは心を決めるまで黙っていた。「そう、きみの宇宙船は何でできているんだい？」とついに彼は口を開いた。

ニ・タイは天井を見上げた。「おい、<でかぶつ>」と呼ぶ。「こいつはわたしを馬鹿にしているのか？ 彼が本当に必要としているのは、わたしの船が何でできているかではないはずだ、そうだな？ わたしを馬鹿にするんなら、わたしはもう出て行く。誰もがいつでもわたしを馬鹿にしているから、こういうことはよくわかるし、おもしろくも何ともない」

「彼には肝心なものを考えるのにウォーミングアップする必要があるんだよ」<でかぶつ>がいった。「だからきみは我慢してやらなくては」

ニ・タイはジョーに目を戻した。「彼のいうことが正しいようだな。わたしは書くのが速すぎるので、わたしの詩にはきまって言葉や文節が抜けていたりする。だから誰にも理解できない。それに我慢することなどほとんど考えたこともないし。結局おもしろいものだったかもしれないのにな。これはきみのオカリナかい？」

ジョーが頷いた。

「わたしもこういうものをよく演ったよ」彼はそれを唇にあて、唐突に静かになって終わる美しいメロディを吹き鳴らした。

ジョーの喉のしこりがいっそう硬くなった。そのメロディは、彼がその楽器で覚えた最初の曲だったのだ。

「これがわたしの覚えたただ一つの曲なんだ。もっと長いものを演るべきだったんだろうがね。さあ、きみが演れよ。多分きみのウォーミングアップになるから」

ジョーはかぶりを振るだけ。

ニ・タイは肩をすくめ、掌でオカリナをひっくり返した。「不愉快だったのかい？」

「そう」しばらくしてジョーはいった。

「どうしようもない」とニ・タイ。「してしまったあとだからな」

ランプ「口をはさんでもいいかね？」と<でかぶつ>がいった。

ニが再び肩をすくめた。「どうぞ」

ジョーも頷いた。

「ジョー、きみも読書をすれば、ある種の作家がきみの見つけたものすべてを見つたり、きみのしたすべてのことをしたりしたことがあるように思うだろう。シオドア・スタージョンという古代のSF作家がいるんだが]わたしは彼を読むたびにいつも胸が張り裂けるような感じを覚える。彼は、わたしがかつて見たような、窓に映るあらゆる光の閃き、スクリーンドアに映るあらゆる葉叢などを見たことがあるようだし、またわたしがかつてしたようなこと、ギターを弾くことから、二、三週間をテキサスのアーカンソー水路の船上で過ごすことまで、あらゆることをしたことがあるようだ。しかもそうしながらも彼は小説を書いていたんだろうし、それも四千年前のことなのだ。そして、ほかにも大ぜいの人が同じ作家に同じものを見出すわけだが、彼らはきみのしたことを何もしてはいないし、きみの見たものを何も見てはいないのだ。こういう作家はまれにしかいない。だがニ・タイ・リーはその種の作家なのだ。きみの詩は数多く読ませてもらったよ、ニ・タイ。わたしの感想は、言葉で表わすとしたら、まごつくときがいいようがないな」

「そうかい」とニ・タイ。「ありがとう」そして顔をほころばせたが、それは顔を伏せても隠しきれなかった。「わたしは傑作をたくさん紛失した。それとも書き留めていなかったのかな。少しでも見せられたらいいんだがね。実際、傑作なんだよ」

「わたしもそう思うよ」と<でかぶつ>。

「そうだ」ニ・タイが顔を起こす。「きみはわたしを必要としていたんだっけ。きみが何を訊いたのかすっかり忘れてしまった」

「きみの船のことだよ」とジョーがいう。

ドライブ「ただ非多孔質の隈石をくり抜き、後部にケイゾン推進機関をボルト締めして、噴射炎の透過率を制御して動かしているだけだよ」

「そう、そうだ！」と<でかぶつ>が叫ぶ。「まさにそういうふうになっているんだ！左回転のラチェットでケイゾン機関をボルト締めしたんだっけ。ネジ山が合っていないんだろ？何年も前のことだったが、こんなに美しい小船だったのか」

「ネジ山のことはあたってるとニ・タイ。「ただわたしはプライヤを使ったんだけどね」

「それはたいしたことじゃない。実際にきみはそうしたんだから。きみに話したことがあるね、ジョー、こういうとんでもないことをする作家もいると」

「それには異議がある」とニ・タイ。「わたしは実際に本質をつかむほど長く一つのこと

に固執しない　それを一詩句か一文で表わせるようになるだけで充分、それでもう別のことに気が移ってるのさ。わたしはこわがってるんだと思う。だから、わたしは実際にできないことごとを埋め合わせるために書いているんだ」

ここでわたしは少し良心の呵責を覚えた。リス墜落の一時間前、わたしの最新作を議論していた時に、わたしはノーンに同じことをいったのだ。わたしを覚えておいでかな？わたしはジュエルだ。

「でも、まだきみはおれぐらいの歳じゃないか」ジョーが口をはさんだ。「どうしてきみはこんなことができ、しかもそんな若さで書けるんだい？」

「それは……つまり……本当はわからないんだ。ただするだけ。それでも執筆に忙殺されてできないことがたくさんあるはずなんだ」

「また口をはさむよ」と<でかぶつ>。「彼にあの話をしてはいけないかね？」

ニ・タイはかぶりを振った。

「それはオスカーとアルフレッドのようなものなのだ」と<でかぶつ>。

ニ・タイはひどく安心したようだった。「あるいはポール・V*1とアルチュール・R*2だ」とつけ加える。

「ジャン・C*3とレイモン・R*4のようでもある」<でかぶつ>がリズムをつけていう。「あるいはウィリーとコレット*5」

「それは繰り返す文学のパターンなのだ」と<でかぶつ>が説明する。「先輩作家と後輩作家　ほんの子供にすぎないことがよくある　そして悲劇的なこと。そして素晴らしいものがこの世にもたらされることになる。それがロマン派以来二十五年あるいは五十年ごとには起こっていることなのだ」

「先輩作家とは誰のこと？」ジョーが訊く。

ニ・タイが眼を伏せた。「ミュールズ・アランライドだ」

「聞いたことないな」とジョー。

ニ・タイが眼をしばたいた。「おお。誰でもこんな不快なことは知ってると思ってたのに」

「彼に会ってみたいな」とジョーがいう。

「無理じゃないかな」と<でかぶつ>。「起こったことは、ひどく、ひどく悲劇的なんだよ」

「アランライドはルルだった」一息ついてからニ・タイが話し始めた。「わたしたちは

*1 ヴェルレーヌ

*2 ランボー

*3 コクトー

*4 ラディゲ

*5 ウィリーはアンリー・G・ヴィラルルの筆名で、シドニー・G・コレットとは一時夫婦であった。

いっしょに長い間旅をして……」

「きみはルルと旅をしたのかい？」

「そう、彼とはほんの少しの間」彼は口ごもった。「どうしようもなかった」と彼はいった。

「わたしはしてしまったんだ。どうしようもないことなんだ」

「じゃあ、きみはルルの悲しさのことを知ってるんだね」とジョー。

二・タイは頷いた。「ああ。わたしは彼を売ってしまったんだ。わたしはせっぱつまっていたし、金が入り用だった、それで彼はそうしてくれといったんだ」

「彼を売ったって？ でもどうして」

「金の問題からだ」

「おお」

「そしてその金でわたしは、わたしたちが破壊した世界を再建するために、少し値段の安いルルを買った。だからわたしはルルの悲しさも、ルルを所有することの悲しさも知っている。それは小さな世界で、ほんの少ししか手間がかからなかったけど。そのことはほんの数日前にサン・セヴェリナにも話したが、彼女はひどく動揺していた。彼女もルルを売買して、再建に使っていたから……」

「サン・セヴェリナを知ってるのか？」

「ああ、わたしが宇宙船ゴロだった時、彼女は宇宙共通語^{インターリング}を覚えてくれた」

「嘘だ！」ジョーは叫んだ。

二・タイはかぶりを振り、小声でいった。「ありのままのことだ！ 誓ってもいい！」

「嘘だ！」彼は背を向け、両手を耳に押しあてて、よろめくようにしゃがみこんだ。

背後で、二・タイが大声で呼ばわった。「<でかぶつ>^{ランブ}、きみは彼がわたしを必要としているといったな？」

「きみは非常にうまくその必要を果たしているよ」

ジョーが振り向いた。「ここから出ていけ！」

二・タイがびっくりしたように机の上から降りた。「それはおれの人生だ、ちくしょう、きみのじゃない。おれのだ！」彼は二の鉤爪をつかんだ。「おれのなんだ、おれはあきらめたのに、きみがもっていい道理なんてあるもんか」

二が素早く息をついた。「もうおもしろくもない」机から離れながらいいすてる。「こんなことは今までに何度もありすぎるほどあったからな」

「だがおれはそうじゃない！」ジョーが叫ぶ。まるで彼の何かは暴行され強姦されているような感じを覚えていた。「きみはおれの人生を盗むことなどできないんだ！」

突然二が彼を突きとばした。ジョーは床に転がり、詩人は身を震わしながら彼の上にそ

びえ立っていた。「いったい何をもってきみのものだというんだ？ 多分きみこそわたしから盗んだのだ。どうしてわたしは何事もやりとげられないようになったのか？ わたしが仕事を手に入れ、恋に落ち、子供をもつたびに、どうしてわたしは、突如引き離され、何度も何度も同じ混乱を起こすことになる、別の糞の山にほうりこまれるようになったのか？ きみがわたしにそうしているのか？ きみがわたしをわたしのものであるものから引き離し、わたしの築いた何千もの美しい人生を取りあげているのか？」突然彼は目を閉じ、左手を右肩にあげた。首をのけぞらせ、天井に向かって歯擦音を出す。「くそっ、わたしは前にこのことを何度繰り返したろう？ もう、うんざりだ、くそっ！ うんざりなんだ！」肩を鉤爪でひっかけ、五本の血条が胸の方に伝っていく まさにその瞬間、ジョーの心に、リリーの嘲笑から逃げ出し、眼をかたく閉じ首をのけぞらせて、肩に爪をたてた時の情景が閃光のように浮かんできた。彼は念頭からその思い出を振り払い、眼をしばたいた。鮮やかなみみずばれが走ったニ・タイの肩には、たくさんの古い傷痕が刻みこまれていた。

「いつもこうだ、いつもふりだしに戻る、いつも同じこと、いつもいつも！」ニ・タイが叫ぶ。

ドアの方によろめくように歩いていく。

「待ってくれ！」

腹筋を使って起きあがると、ジョーは膝立ちであとを追った。

「きみはどうするつもりだ」彼はニ・タイの前に躰か投げ出し、ドアに腕をかけて行手を阻んだ。

ニ・タイがジョーの前腕に鉤爪をかける。ジョーは首を振った ビリー・ジェームズが運河から帰る途中の彼を通せんぼした時も、こんなふうによつの腕に鉤爪をかけ、そうしてあのことが起こったのだ。

「わたしの船に戻るんだよ」ニ・タイは落ち着き払っていった。「そしてあの太陽に向かって、スロットルをいっぱいに入れればなしにするんだ。わたしはそれを一度は笑いながらやった。恐らく今度は泣きながらだろう。まあ、その方がおもしろいことだろうさ」

「でもどうしてだ？」

「それはいつの日か」ニ・タイの顔が言葉の圧力にしかめられる 「ほかの誰かが、まず笑いながら、ついで泣きながら、銀色の太陽に飛び込んでいくことになった時、彼らはそのことを読んだのを思い出し、突然知ることになるからだ、わかるかね？ 彼らは彼らだけじゃなかったことを知るのだ」

「だけど、誰にもきみのいいたいことは読めない」

ニ・タイは彼の腕をぴしゃっと打ち払い、管の中に駆け込んだ。ちょうど入れ違いに、

一束の紙を口にくわえたディクが入ってきたのも気付かずに。

管がスポンとはずれ、コンソール・ルームのドアが閉じると、有機^{オーガニウム}気泡がすぐさまその部分を埋める。ニ・タイが制御盤にかがみこんでいるのが見てとれた。やがて、自動パイロットがその中空の限石を光り輝く太陽の方に向けるのを、展望窓に顔と手を押しあててジョーは見つめた。押しつづけた目蓋が痛くなるまで眼を細めてそのあとを追う。船が見えなくなっても、一分間ほどすすり泣きがインターコムを通して聞こえていた。

顔をなでながらジョーが壁から振り返る。

ディクが紙束の上に坐って、折れ曲がった紙の隅をかんでいる。「それは何だ？」

「ニ・タイの詩だよ」<でかぶつ^{ランブ}>がいった。「彼が書いていた最新の一束だ」

「ディク、おまえはそれを彼の船から盗^とってきたのか？」ジョーが問いたです。

「そういう者のおかげで、彼らが破棄してしまう前にその著作を取りあげることができるのだ。そういうふうにして彼の全著作は日の目を見た。こういうことは今までにあったんだよ」<でかぶつ^{ランブ}>がうんざりしたようにいう。

「だけどディクはそんなことを知っちゃいない」とジョー。「おまえは盗んできただけだよな？」なじるようにいう。

「きみは悪魔猫を過小評価している」と<でかぶつ^{ランブ}>。「彼はシンプレックスではない」

ジョーは身をかがめ、ディクの下紙束をひっぱった。ついに、彼の手を二、三度ぴしゃっと打ってディクが転がる。そしてジョーはそれをもって机の下に這い込んだ。

第 11 章

三時間後、机の下から出てきたジョーは、ゆっくりとガラス壁に歩き、もう一度眼を細めて白色矮星を見た。やがて振り向くと、オカリナで三つの音色を吹き鳴らし、そして手を降ろした。

「あいつはおれが今まで出会ったなかでもっともマルチプレックスな意識だったと思う」

「そうかもしれない」と<でかぶつ>がいう。「だが今やきみも、そうなのだ」

「彼が太陽に飛び込まなきゃいいが」とジョー。

「ここからあそこまでの間に彼の興味をひくものが見つければ、大丈夫だよ」

「ここからではそんなものはなさそうだが」

「リーのような者の関心をひくには、たいそうなものはいらないよ」

「きみがマルチプレックスについていったこと、つまり観点の理解だけど、彼は完璧におれの観点を引き継いでいた。きみのいう通りだった。しかし気味が悪いな」

「別のマルチプレックス意識を知覚するには、マルチプレックス意識が必要なことはわかるね」

「なんとかわかるよ」とジョー。「彼はおれを理解するのに彼の経験全部を使っていた。それをおれはおもしろく思ったよ」

「彼はきみの存在を知る前にそれだけの詩を書いたのだ」

「その通りだ。だけどそのことが余計に不思議に思わせるんだよ」

「思うに」と<でかぶつ>。「きみは本末転倒の演繹を行なったのだ。彼を理解するのにきみの経験を使っていたからね」

「おれが？」

「きみは最近多くの経験をした。それらをマルチプレックスに整理し直せば、それらはもっとはっきり理解できるようになる。そして十分に理解できれば、充分な混乱が残り、その結果きみは正当な質問ができることになるのだ」

ジョーは整理するためにしばし黙した。そしていった。「きみの意識の基となったルルの名は何だったんだ？」

「ミュールズ・アランライド」と<でかぶつ>がいった。

ジョーが窓の方に向き直る。「じゃあこれはすべて前に起こったことなんだな」
再び沈黙の一分が流れ、そして<でかぶつ>がいった。「この旅の最終行程をわたし抜きでやらねばならないことはわかるね」
「ちょうどそのことを整理しかけていたんだよ」とジョーがいう。「マルチプレックスに」
「よろしい」
「おれはひどくこわがっている」
「その必要はない」と<でかぶつ>。
「どうして？」
「きみの小物袋の中には結晶化したトリトヴィアンがいる」
もちろん、彼はわたしのことをいていた。わたしをお忘れでなければよいが、もしお忘れなら、あとの物語がわかりにくくなりますよ。

第 12 章

「それでおれはどうすればいいんだ？」とジョーが訊いた。

彼はわたしを机上のピロードの上に置いた。コンソール・ルームの高い天井の照明は薄暗く、給湿機からの薄い霧に^{こううん}光量を描き出している。

「どうすべきか定かでない時にできるもっともマルチプレックスなことは何か？」

「質問することだ」

「では質問しなさい」

「それが答えなのか？」

「それを知るにはわたしに訊くよりもたやすい方法がある」と<でかぶつ>。

「ちょっと待ってくれ」とジョー。「おれの知覚をマルチプレックスに整理しなくては。少し時間がかかるかもしれないよ。慣れてないからね」しばらくして彼はいった。「どうしておれは帝国軍に加わり、ナクター王子に仕えねばならないんだ？」

「上出来だ」と<でかぶつ>。「わたし自身も不思議に思っているんだ」

なぜなら、とわたしは精神投射した、その軍隊はきみと同じ進路を行くからだ。話ができることには安心感がある。だが、結晶化の難点の一つは、直接尋ねられた時にしか答えられないことだ。

偶然、「慣れてないからね」とジョーがいった時と彼が質問を口にした時の間に、無線放送が割り込んで、ナクター王子の声がこの区域にいるすべての人間にただちに兵役に就くよう通告し、それに呼応して、「これできみの問題は片がついたと思う」と<でかぶつ>がいったのである。だからジョーの質問は全然不可解なものではないのだ。ここでこの論旨が理解できる人のために強調しておきたい、マルチプレックスは完全に論理法則内にあるのだ、ということ。わたしは混乱すると思ったから、その出来事を省いたのであり、完全にジョーの質問から推論できると思ったし、またマルチプレックスな読者ならざっとみずから補足するだろうとも考えたのだ。わたしはこういうことをこの物語中で何回か行なっている。

「どうしておれは伝言を届けるというだけの仕事を続けられないのか？」とジョーが訊く。

結晶化していると、修辭的な質問をされてもそれなりに答えることができる。きみに伝言を届ける用意ができているのか？ とわたしは投射した。

ジョーが両の拳で机をドンと叩く。わたしが前後に揺れるのに合わせて、部屋全体が揺すぶられているように見えた。

「くそっ！ 伝言とは何なんだ？ 今それを知らなくちゃならない。いったい何なんだ？」

誰かがルルを解放したのだ。

ジョーが立ち上がり、関心はその顔の若皺を深くした。「それは非常に重要な伝言だ」関心がしかめっつらに変わる。「いつおれはそれを届ける用意ができるんだい？」

誰かが彼らを自由にした時だ。

「だけど、おれは進むだけだった……」ジョーがいいよどんだ。「おれ？ おれが彼らを自由にするのか？ だけど……おれには伝言を届ける用意はできるかもしれないが、おれがいつ彼らを自由にする用意ができるかなんてどうしてわかるというんだ？」

きみが知らないのなら、とわたしは投射した。明らかにそれは伝言ではないのだ。

ジョーは混乱し、また恥ずかしくも思 った。「だけど、それはそうであるべきだ」

それは質問ではなかったので、わたしは何も投射できなかった。しかし<でかぶつ>が肩代わりしてくれた。「それが伝言なんだよ。きみが誤解しただけだ。矛盾のない別の解釈を考えてみればいい」

ジョーがテーブルから振り返った。「まだ十分に理解できない」と気落ちしたようにいう。

「時には他人の眼を通して見なければならぬことがある」と<でかぶつ>。「ここで、ジュエルの眼を使ってみれば、きみが偉大なことをしているのがわかるだろうがね」

「どうして？」

「きみは次第にルルに、そしてわれわれの解放闘争に深い関心を持ちつつある。トリトヴィアンたちはこの闘争におけるもっとも活動的な非ルル種族だ。ことほどさように単純なことなのだ。しかも、そのことは軍隊での出世を非常に容易なものにするのだ」

「そんなことができるのかい？」ジョーが訊く。

「ひどく簡単なやり方でね」と<でかぶつ>がいう。「きみでもできるよ。トリトヴィアンを手に取りなさい」

ジョーが机に向き直り、ピロードからわたしを取り上げた。

「さあ、右の目蓋をあげて」

ジョーはそうした。そして<でかぶつ>の指示に従ってほかのこともした。一分後、彼

は苦痛の叫びをあげ、机からよろけると、両手で顔を覆って膝をついた。

「痛みはしばらくすればなくなる」と穏やかに<でかぶつ>。「苦痛があまりにひどいよ
うなら、目薬をあげるけれど」

ジョーはかぶりを振った。「苦痛じゃないんだ、<でかぶつ>」と囁くようにいう。「お
れには見える。きみが、おれが、ディクが、ジュエルが、ただみんなが同時に見えるん
だ。それに、おれを待っている軍艦も、ナクター王子さえも見える。だけど、その軍艦は
百七十マイルも離れているし、ディクはおれのうしろ、きみはおれをぐるっと取り巻いて
いて、ジュエルはおれの中、そしておれは もはやおれではない」

「しばらくは歩く練習をした方がいいと<でかぶつ>。「特に螺旋階段などまず無理だ。
それよりも、腰を据えて考えることに慣れた方がいい。そうすればわれわれはもっと複雑
なことに進める」

「おれはもはやおれではない」ジョーがそっと繰り返した。

「オカリナを吹きなさい」と<でかぶつ>。

ジョーは、自分が小物袋から楽器を取り出し、唇にあてるのを見、目蓋が、左眼と、右
眼にかわったきらきらと光る存在を閉ざすのを見た。そして自分が長い、静かな調べを始
めるのを聞き、ディクがためらいがちに近づいてきて、彼の膝に鼻をこすりつけるのを、
両眼を閉じたままで見た。

しばらくしてジョーがいった。ランプ「<でかぶつ>、おれにはジュエルに話しかけ
て得るものがあつたとは思えない」

「なるほど彼を通じて見るほどにはね」

「おれにとってはまだ伝言はひどく朦朧としたものにすぎない」

「きみは掛酌なくとはいけない。彼のように闘争中ならば、もっともマルチプレク
スな意識といっても徹底して直線的になる。しかし彼の深層意識は正常だ。実際、マルチ
プレックスに考察したなら、彼が多くのことを述べていたことがわかるはずだよ」

ジョーは自分の顔が精神を集中するのを見た。ちょっと滑稽だな、とついでに考える

ダイヤモンドのモノクルをかけた、心配症な亜麻色の毛のリスみたいで。「伝言は誰
かがルルを解放したという言葉にちがいない。だからおれはルルを解放する用意をしな
ければならないんだ。ただ解放するのはおれじゃないというだけのことなのさ」彼は<
でかぶつ>がこの論法に同意するのを待ち受けた。だが、沈黙だけ。それで彼は言葉を続
けた。「おれだったらいいんだけどね。しかしそうでないわけがあるんだと思う。それに、
おれは伝言を届ける用意もしなければならない。といっても、実際におれの用意が整うの
は、ルルを解放する誰かさんの用意ができたのを確かめた時だけ」

「その通り」<でかぶつ>がいった。

「その人物を見つけるにはどこへ行くべきなのか、そして彼にルル解放の用意ができたことはどうすれば確かめられるのか？」

「きみみずから彼に用意させなければならないのかもしれないよ」

「おれが？」

「きみはここ数か月の間に教育を受けてきた。その教育のほとんどを、この旅を始めた頃のきみのようなシプレックスの者に伝授しなければならなくなるのだ」

「そうしてニ・タイがおれに託していたユニークなものまで失ってしまうのか？」

「そうだ」

「じゃあ、そんなことはごめんだ」とジョー。

「いや、やるんだ」「なあ、おれは過去の人生を盗られてしまったんだよ。なのにきみはおれの新しい人生までほかの誰かさんにやっちまえという。おれはごめんだ」

「それは非常に利己的な」

「しかも、おれはシプレックス社会のことなら充分知ってるし、軍隊にいてできることといえば、一人や二人の見逃しはあるとしても、それを破壊することだぐらいのことも知っている。だからごめんなんだ」

「おお」と＜でかぶつ＞。「そこまで考えたのか」

「そう、考えた。しかもそれはひどく痛ましいことだ」

「破壊はきみが行く行かないにかかわらず起こるだろう。その唯一の違いはきみが伝言を伝えられないことだ」

「彼にはおれ抜きで用意ができないんだろうか？」

「その点に関してはまったく知る術がない」

「運を天に任せてみるさ」とジョー。「おれはどこかよそにおさらばするよ。おれが行っても行かなくても、万事がもっともよかれという結末に落ち着くことに、おれは賭けてもいい」

「それがいかに危険なことか全然きみは考えてない。ねえ、まだ少しばかりの時間はあ
るね。ちょっと寄り道して行こう。きみの心を変えさせるものを見せたいんだよ」

「＜でかぶつ＞、奴隷のように駆られ、搾取されて、長い間苦しんでいるルルをおれに見せても、効果があるとは思わないよ。そういうところにおれを連れてくつもりなんだろ？」

「ルルの苦しみはきみに起こることであって、ルルにではない」と＜でかぶつ＞がいう。「ルルでない限り、ルル自身の観点からルルの苦しみを理解することは不可能だ。理解というも帝国が彼らを保護するための一手段なのだ。ルルでさえ自分の境遇のひどさがわからないでいるのだ。これは衆知のことだから、わたしの言葉をそのまま鵜呑みにしてく

れたまえ。マルチブックスでも越えられないある種の壁があるんだよ。時にはうち破ることもできるけれど、それは非常に難しく、地面に傷痕を残すことにもなる。だからその不透過性を認めることこそが、その破壊の第一歩なのだ。わたしはきみのお好みのどのブックスでもわかるものを見せてあげるつもりだ。サン・セヴェリナと話をするんだよ」

第13章

「これが、彼女がルルを使って再建した世界の一つなのか？」空っぽの都市の銀色の通りを、ついでさざ波立つ背後の湖のほとりまで起伏している木々の生い茂った丘陵を眺め渡しながら、ジョーが尋ねた。

「これがその一つだ」とオスカーがいった。「完了した最初のもので、かつ再居住できる最後のものでもある」

「どうして？」新しい鑄鉄の溝格子の上を歩きながら、ジョーが訊く。青白い太陽が、彼らの左手にある大きな塔に巻きついている螺旋窓に照り映える。右手には、空^{から}のまま放置されている荘大な噴水。通り過ぎる際に、その四十フィートのプールの乾いた花崗岩の縁に、ジョーは指を走らせた。

「彼女がここにいるからだよ」

「あとどれだけ仕事が残っているんだい？」

「すべての世界は再建された。四十六の文明も復興した。だが時間を要するあの倫理大系が残っている。もう六か月はたっぷりかかるはずだ」オスカーが、真鍮の鉸がうってある黒い金属ドアを身振り指し示した。「あそこに入るんだ」

ジョーは巨大な尖塔群を見回した。「美しい」と口に出す。「本当にだよ。彼女がなぜ再建したかったのか少しはわかるような気がする」

「この中だ」とオスカー。

ジョーが中に踏み込む。

「この階段を降りて」

彼らの足音が薄暗くて広い階段に響く。

「ここに入るんだ」オスカーが灰色の石壁にある小さなドアを押し開いた。

中に入ると同時にジョーは鼻に皺を寄せた。「おかしい匂いが」

彼女は裸だった。

その手首と足首が床に鎖でつながれている。

灰色の光が彼女の丸めた背中を横切ると、彼女は柵に抗いながらも後じさり、吠えた。唇がめくれ、それほど長いと知らなかった歯がむきだしになる。吠え声が歯ざしりに変

わる。

彼は彼女をじっと見つめた。

彼女をじっと見つめながら、彼はドアの方に後ずさったが、ドアはガシャンと音をたてて背後で閉まってしまった。

緊張が彼女の肩の筋肉を引き締め、いかつくさせている。その首は筋ばり、もつれてくしゃくしゃの髪の毛が顔の半分を覆い隠している。ウシ、という無意味な連想。おお、赤いウシだ。そして涙が彼の本物の眼に盗れるのを見た。もう一方のはつっけんどんに乾いている。

「ここに彼女は拘留されているのだ」とオスカーがいった。「自殺できないように鎖も短くしてある」

「誰が？」

「ほかに二十六人いたのは覚えてるだろう。おお、彼女はとっくにルルを解放してやれる限度を越えてしまったのだ。しかしこうしてほかの者が彼女を拘留しているので、彼女のルルは働き続けているんだ」

「それは公正じゃない！」ジョーは叫んだ。「どうして誰かが彼女を解放しないんだ」

「彼女はこうなることを知っていた。だから事前に彼らにこうしなければいけないとっておいたのだ。彼女は自分の限界を知っていた」オスカーが悲痛な顔をする。「ルルが七匹。かつて一人の人間がいつときに所有した数では一番多い。実際多すぎるんだ。しかも悲しみはルルが建設すればするほど大きくなる。等比級数的に。その価格のように」

驚愕し、すくみあがり、胸を引き裂かれながらも、ジョーは彼女を見つめた。

「きみがここにきたのは彼女と話をするためなんだよ」とオスカー。「やってみたらどうだい」

ジョーは自分が慎重に前に進んでいくのを見た。彼女の手首と足首にはかさぶたができていた。

「サン・セヴェリナ？」

彼女が身を引き、喉を締めたような声が出る。

「サン・セヴェリナ、おれはあんたと話をしなくちゃならない」

細い血のしたたりが左手の甲の靭帯からミミズのように這い出ている。

「喋ることができないのかい？ サン・セヴェリナ」

鎖をじゃらじゃら鳴らし、歯をむきだしにして、彼女が突進してきた。後ろへ跳んでよけていなかったら、脚にかみつかれていたところだ。彼女は舌をかみ、悲鳴をあげて石の上に崩折れた。

口が血でいっぱいだ。

ジョーに見えたのは、自分がドアを連打し、一分後にオスカーにその手を抑えられる光景だけだった。オスカーが取手を引き、彼らは転げるように階段の下に出た。階段を登り出した時には、オスカーの息使いも荒くなっていた。「彼女のことは気の毒に思う」と階段の半ばで彼が口に出した。

びっくりしてジョーが彼の方を見る。「きみには……」

「もちろんルルも気の毒だ」とオスカーがいう。「わたしもルルなんだからね、そうだろう？」

ジョーは自分が混乱しながらも再び階段を登り出すのを見た。「おれも彼女を気の毒に思う」とジョーがいう。

「軍隊に入る気になったかね？」とオスカー。

「くそッ^{ジャッ}」とジョー。「なったとも」

「そういうと思ってたよ」

彼らが階上のドアから再び通ゆに出た時、ジョーは光に眼を細めた。「ニ・タイだ」しばらくして彼がいった。「彼は数日前にサン・セヴェリナと話をしたといった」

オスカーが頷く。

「ここで？彼はこんな彼女に会ったのか？」

オスカーが再び頷く。

「じゃあ、彼もこうしたのか」とジョー。通りを歩き始める。「あんなやつ太陽に突っ込んじまえばいいんだ」

「催眠術をかけるとかして、彼女を何とか眠らしておくことはできないのかい？」コンソール・ルームに戻ったジョーは、ガラス壁を通して眺めながら、感慨にふけた。

「彼女が眠ると、ルルは建造をやめる」<でかぶつ^{ランブ}>が答えた。「契約にそう謳われているんだよ。ルルが役目を遂行するには、所有者は常に所有者たることを意識していなければならない、とね」

「そのことはおれも多少は考えてみた。どうしてきみは彼女がその……獣のことを意識していると確信できるんだ？ 誰にも彼女の肩がわりはできないのかい？」

「彼女はその獣の保護者なんだよ」と<でかぶつ^{ランブ}>はいった。「もう出発の用意はできたかね？」

「いつでも出かけられるよ」

「では、それ以上にマルチプレックスな評価を必要とするコンプレックスな意見を解釈してもらいたい。つまりこうだ。いかなる、社会においても唯一重要な因子は、芸術家と犯罪者である。なぜなら、彼らだけが社会の価値を問うことによって、社会を変化させるからだ」

「それは真実なのか？」

「わからない。わたしはマルチプレックスにそれを評価したことがないんだ。それでも、いわばきみは一つの社会を変えることになる。とって、ニ・タイが芸術家として受けねばならなかったような教育を、きみは受けたわけではない」

「おれは今できみといっしょにいたんだぜ、<でかぶつ>」とジョーがいう。「<でかぶつ>、それで帝国軍はいったいどこへ行くんだい？」

「エンパイア・スターだ」と<でかぶつ>はいった。「きみが最初に行なう犯罪行為が何か、わかっているのか？」

ジョーは一瞬口ごもった。「いや、きみが軍の目的地を教えてくださいまで、おれは無届外出だAWOLと思っていた。でも今ははっきりそうとはいいきれない」

「よろしい」と<でかぶつ>。「さようなら、ジョー」

「さよなら」

第14章

すぐさまジョーは帝国軍が自分の性に合わないことがわかった。全長十マイルの宇宙船に三分間ただけで。というのも、ほかの新兵たちと船内をぶらついていた時に、悠々と歩いてくるナクター王子に出会わしたからだ。新兵たちが道をあけ、ナクター王子がディクを見つけた。悪魔猫は宙を蹴りながらギャアギャアいていた。ジョーが彼を拾い上げるのと同時に、ナクター王子がいった。「それはおまえのか？」

「そうであります、閣下」とジョーは答えた。

「そうか、しかしそういうものは船内に持ち込んでならん」

「わかりました、閣下」とジョー。「ただちに処理いたします」

彼の拡張した視覚をもってすれば、この戦艦内にディクを隠す場所を見つけるのは何の造作もないことであった。戦艦は数年前に再改装されたところで、旧式の装置の多くが取り除かれ、ずっとコンパクトな装置にとりかえられている。直視型映像再生機を装備した古い展望室はうちすてられ、ガラス壁で覆われた船殻区画も、最初はほとんど必要とされないものの倉庫に使われていたが、今では密閉されてしまっている。

ジョーは器具保管室に忍び込み、クロトン・レンチを失敬すると、密閉された昇降口に向かった。レンチでそれをこじあけて、ディクをその暗闇の中にシッシと追い込み、ドアを閉じ直しかけたが、そのときある考えが閃いた。器具保管室にとって返すと、アルファベットの型紙と黄色のペンキを一缶と刷毛を一本取り出した。昇降口に戻って、ドアにそれで字を書いた。

Ｊ・Ｏ以外の者

許可なくして

入るべからず

上層^{うえ}に戻った彼はちょうど制服と装具の支給に間に合った。補給係将校が認識票を見せるといった。ジョーは持っていないと答える。補給係将校は管理コンピュータのもとに談合に行った。ジョーはまた昇降口に戻り、中に入った。そこは小さな通廊になっていて、頭の天辺が天井に軽くすれ、黄色い髪の毛が挨まみれになる。そのとき、音楽が聞こえて

きた。

ずっと前に、宇宙船ゴロだった時に、彼はそのような音楽を聞いたことがあった。ロンのギターだ。ただこのギターは、ずっと速い調子で、違った弾き方^ひをしている。それにその声　彼は今までそんな声を聞いたことがなかった。彼のオカリナのように、静かでも朗々としている。

彼は立ち止まり、覗き込みたい誘惑に駆られたが、それをぐっと抑えた。いったん歌が終わり、メロディを繰り返したのをしおに、彼は自分の楽器を取り出し、その歌に合わせて吹き鳴らし始めた。歌がやみ、ギターがやんだ。ジョーはメロディを最後まで吹いてから、前に踏み出した。

彼女は山積みされた水晶塊の前の床に坐っていた。宇宙船のガラス壁から、タンタマウントの白色光が射し込んでいる。ギターから起こしたその顔が　暗く翳^ひっていたが、整った美しい顔立ちで、ふさふさした褐色の髪を一方の肩にかけている　無言の恐怖にひきつた。

「何をしてるんだ？」ジョーが尋ねた。

彼女は水晶塊の山に身を寄せるように後ずさり、ギターの白い面上にあてた手の指が滑り、ワニスの上に白く光る筋を残した。

「ディクを見なかったかい？」とジョーが訊く。「かなり大きな、八本足で角^つのある悪魔猫なんだけど。十五分ほど前に入ってこなかったかい？」

彼女は激しく首を横に振ったが、その動作の激しさは、否定が全般的なもので、彼の特定の質問とは無関係だと告げていた。

「きみは誰だい？」と彼が訊く。

そのとき、ディクが水晶塊のうしろから出てくると、娘の前に跳び出し、ごろんと仰向けになり、宙を蹴り、ニャオと鳴き、舌を突き出した。つまり、要するに、人の気をひこうとしていたのである。ジョーが裸足の爪先を伸ばしてディクの腹をかいてやる。躰が受けつけようとしないので、彼はまだ裸のまま、制服は腕にかけていた。

娘は、首まで覆う白いブラウスと、膝下まである黒いスカートを身に着けている。彼をこわがったのば、すべて彼の制服が意味するものにあっただようだ。というのも、彼女は穴のあくほどそれを見つめていたからだ。思考の混乱につれて、彼女の顔の筋肉が動くのが見てとれる。

「きみは歌がうまいね」ジョーがいった。「こわがらなくてもいい。おれの名はジョー。こんなところできみは何をしてるんだい？」

突如、彼女は両目をかたく閉ざし、ギターを膝に落とすと、両手で耳を覆った。「歌ってたのよ」と早口でいう。「あたしはただ歌ってただけ。歌うことがこの世で一番大切な

ことなのよ。誰にも迷惑はかけてないわ。いや、あたしに何もいわないで。どんな質問にもあたし答えたくない」

「きみはかなり混乱しているようだね」とジョー。「訊きたいことはあるかい？」

彼女は首を横に振ると、まるで打擲を避けるかのように首をすくめた。

ジョーは眉をひそめ、口をへの字に曲げた。唇をかみしめ、やっとのことで口に出す。「きみがそんなにシンプレックスだととても信じられない」水晶塊のそばにうずくまるように彼女がさらに後ずさる。「おれが本当の兵士じゃないことはわかるだろ」

彼女が眼をあげた、「じゃあどうして制服を持ってるの？」

「そら！ きみは一つ尋ねた」

「まあ！」彼女が身を起こし、手を口にあてた。

「おれは非常に兵士に近いところにいるから制服をもってるんだよ。外に出る時だけは着なくちゃならないけど、きみがこわがるんだったら、ほってしまってもいい」彼は水晶の山の上にほうり投げた。娘が肩を落とし、目に見えて和むのがわかった。「きみは兵隊たちから隠れているんだね」とジョーがやさしくいう。「見つけられても、シンプレックスだと思わせたいんだろ。きみもエンパイア・スターに行くのかい？」

彼女は頷いた。

「きみは誰？」

彼女はギターを手に取った。「いわない方がいいわ。何もあなたを信用していないわけじゃないの。だけど、この戦艦で知ってる人が少ないほど都合がいいのよ」

「わかった。だけど別の質問には答えてくれるんだろ？」

「ええ。ナクター王子配下の兵士は全員、あたしを殺すためにエンパイア・スターに向かっているのよ、あたしが先にそこに着かないように」

「それはおれの訊きたかった質問の答えじゃない」

彼女はひどく当惑したようだった。

「でもかなりいい答えだったようだ」ジョーはほほえんだ。

彼女が手を伸ばしてディクの腹をかく。「いつかはあたしもあの尋ねられる前に答えるって方法を習うわ。それができるようになった時はきっと感動的でしょうね。あなたはこれがどういうことなのか訊くと思ったのよ」

ジョーはまごついた。そして笑う。「きみは兵士の鼻先にいることで彼らから隠れている！ まさにマルチプレックス！ まさにマルチプレックスだ！」彼はディクを間において床にあぐらをかいた。

「それに、彼らといっしょに行く限り、あたしは彼らより遅れてそこに着くことにはならない。悪くても同時に着くのよ」彼女が口を閉ざす。「でもあたしが先に着く方法を考

えなくちゃいけないわ」

ジョーもディクをかき、二人の指が触れ合った。彼がにこっと笑う。「おれはただきみがどこからきたのか訊きたかったんだよ。きみがどこへ行くのか、今きみがどこにいるかはわかってるから」

「まあ」と彼女。「あなた、ミス・ペリーピッカーを知ってる？」

「誰だって？」

「どこと訊くべきだわ。＜うら若き女性のためのミス・ペリーピッカー花嫁学校＞のことよ」

「それは何だい？」

「あたしはそこからきたの。そこは、良家から生まれつき立派な子女を預かって、あなたも信じられなかったようなシンプレックスに思わせる方法を教える、まったくぞっとするところなのよ」

「確かに信じられなかったよ」とジョー。

彼女が笑った。「あたし、ミス・ペリーピッカーの落ちこぼれなの。そこには楽しいこともたくさんあったと思うわ　テニスや無重力バレーボール、水球、室内ハンドボール　これ、あたし大好きよ　それに立体チェスなんか。いろんなことを知ってる教師も少しはいたけど、でも、あたしが本当に好きな歌やギターは、あたしひとりで覚えたのよ」

「きみはしょうずだよ」

「ありがとう」彼女は降下和音を爪弾き、口を開けて、ゆるやかで、しかも不意に音程のあがるメロディを歌った。それは、ジョーがルルに歌ってやった時以来感じたことのない、満足や郷愁や喜びの琴線に触れた。

彼女が歌いやめた。「ルルの作った歌よ、あたしの大好きな曲の一つなの」

「美しい」ジョーが眼をしばたたきながらいった。「続けてくれ、最後まで歌ってくれ」

「これだけなの」と彼女。「ひどく短いよ。音符は六つだけ。それだけで必要なことはすべて行ない、そして終わるの。ルルの作るものはみんなひどく儉約的なものよ」

「おお」とジョー。そのメロディは虹のように彼の心を和ませ、静説にし、広がっていった。

「別のを歌いま　　」

「いや」とジョー。「今のやつをもう少し考えてみたい」

彼女はほほえみ、手をそっと弦に置いた。

ジョーの手がディクの腹の上をあてもなく動いた。悪魔猫は和やかに鼻を鳴らしている。「教えてくれ」ジョーがいった。「どうしてナクター王子はエンパイア・スターできみを殺したがっているんだい？」

「あたしのおとうさまが重病なのよ」と彼女は答えた。「あたしがミス・ペリーピッカーから急に呼び戻されたのも、おとうさまが今をも知れぬ容態だからなの。おとうさまが亡くなれば、あたしが帝国の実権を継承することになっているの　あたしがある場に居合わせたらのことだけ。そうでなかったら、ナクター王子が掌握することになるわ。だからあたしたちはお互いに競争し合ってるのよ」

「きみは帝国の王女なのか？」

彼女が頷いた。

「きみはなかなかの重要人物なんだね」ジョーは驚いていた。

「ナクターに勝たなくっちゃ何にもならないわ、彼はこの時を何年も待ってたんだから」

「どうしてきみでなくてはならないんだい、ナクターじゃだめなのかい？」

「一つには、あたしがルルを解放するつもりだからよ。ナクター王子は彼らを自分の保護下におきたがっているわ」

「わかった」彼に頷き、膝を抱いた。「どのようにしてきみはそれをやるつもりなんだ、それにどうしてナクターはそうしないんだ？」

「経済よ」と娘が答える。「あたしには帝国内でもっとも富裕な者二十六人の支持がある。あたしがある問題をマルチプレックスに処理できると、彼らは信じてくれているわ。そしてあたしとナクターとの競争がどうなるか、その結果をエンパイア・スターで待ち受けているの。彼らはナクターの支持を拒否しているから、彼に残っているのは帝国軍だけ。彼はマルチプレックスだけど、彼に使える道具は一つしかない。一方向でしかやってもいけないのなら、意志に関係なくシンプレックスと同様になってしまうわ。だから彼らはあたしの到着を待っている、ステンドグラスの窓が青タイルの上に市松模様の影を落としている、真鍮の円柱に支えられた評議会室に集まった人々も、そしてどこかの水晶のベッドに横たわっている重病のおとうさまも……」

「^{ジャップ}ああ」ジョーは胸うたれる思いであった。

「あたしはまだそこに行ったことがないの。ミュールズ・アランライドの小説で読んだだけなの。ミス・ペリーピッカーではあたしたち彼の政治三部作を全部読むのよ。あなた、彼の作品は知ってる？」

ジョーはかぶりを振った。「ただ……」

「なに？」

「おれはその評議会室にいる彼らあての伝言を持ってるんだと思う」

「あなたが？」

「だからおれはエンパイア・スターに向かっているんだ。おれには届ける伝言があって、しかももうすぐそれも果たせそうなんだよ」

「それは何なの？」

ジョーが膝から手を放した。「きみが名前をいいたがらないのと同様、評議会室に着くまで、伝言はおれ一人の中にしまっておく方がよさそうだ」

「そう」彼女は満足したように見せかけたが、好奇心がその顔にありありとあらわれていた。

「これだけは教えてあげよう」と半ばほほえみながらジョーがいった。「それはルルに関係があるんだよ」

「そう」ゆっくりと彼女は繰り返した。が、突然膝立ちになると、ギターから身をのりだした。

「ねえ、とりひきしましょ　あなたはあたしの助けがなくては評議会室に入れないんだし」

「どうして？」

「誰にもできないのよ。その部屋を防護している大きなエネルギー^{アイリス}虹彩は、二十八人の精神パターンにしか開かないの　あなたアランライドの本を読んだ方がいいわよ。もうそのうちの二十六人は中に入っているし、あたしのおとうさまは重態だから、もうおとうさまの精神を認識することはできないでしょうね。だから残ってるのはあたしだけ。ナクター王子を負かすのを手伝ってくれるんなら、あなたを評議会室に入れてあげてもいいわ」

「わかった」とジョー。「わかったよ。公平なとりひきだ。で、どんな手助けをしてほしいんだい？」

「そうね」彼女は坐り直しながらいった。「あなたには制服があるから、ここを自由に出入りできるわね」

ジョーは頷き、彼女が続けていうのを待った。

ところが、彼女は肩をすくめてみせ、そして訝しむように見た。「それでわかるでしょ？」

「おれにそのあとを考えるといいんだね」とジョー。「やってみよう。ところで今まできみはどんな手助けをしてもらったんだい？」

「小さなコンピュータに知恵を貸してもらったわ」

「わたしは小さいかもしれない」山積みされた塊にひっかかったジョーの制服の下から声がした。「だがわたしはまだ成長しきっていないのだ」

「うん？」とジョー。

「あれは<^ラで<^ンがぶつ>よ」と娘がいった。「彼はどこにでも存在する」

「言語マルチ・プレックスだ」ジョーがあとを引き継いでいった。「そう。おれは以前に会ったことがある」そこで初めて、彼はそのでたらめな水晶塊がロジック・ブロック

なのに気付いた。しかしびっくりするほど数が少ない。彼にはコンソール・ルームの六十フィートの壁の奥に組み込まれている姿が、見慣れたものだったからだ。

「この戦艦に隠れるのは彼のアイデアなのよ」

ジョーは頷き、そして立ち上がった。「多分」とジョー。「みんなを一まとめにしたら、このことも何とか説明がつけられるんだらうなあ。ちょっと混乱があるような感じがするけれど。そうだ、一つ訊きたいと思っていたことがある。おれたちはエンパイア・スターのどの惑星に行くんだい？」

娘はひどく驚いた様子だった。

「まさか、その恒星自体に行くんじゃないんだろ？」

<でかぶつ>がいった。「彼は知らないようだ。きみは本当にアランライドを読むべきだよ」

「あたしもそう思うわ」そういって彼女は指の関節をかんだ。「あたしがいいましようか？」

「わたしがやるよ」

「きみたちは恒星の中に人々が住んでいるというのかい？」

「そうだ」と<でかぶつ>が答えた。「アウリガの表面温度は華氏二千度以下なのだ。非常に暗い星だから、適当な温度に下げる冷却装置を開発するのは、難しいことではない」

「人々は内部に住んでいるんじゃないわ」と娘がいう。「それにアウリガには惑星は一つもないし」

「それじゃどこに」

「わたしにまかせなさい。お願いだから」と<でかぶつ>。「アウリガは銀河系で一番大きな星というわけではない。太陽の何百倍もの質量を持ち、何千倍も巨大ではあるが。しかし単なる恒星というわけでもなく」

「もっと複雑で」娘がいいかける。

「マルチプレックス化したものなのだ」と<でかぶつ>がいった。「アウリガは長い間、食連星だと思われていた。だが少なくとも七つの巨星。太陽に比べて巨星なのだが、かなり複雑で美しい運動をして、お互いの周りを回っているのだ」

「ただ一点を中心に」と娘がいう。「その点が帝国の中心なのよ」

「回転する世界の唯一の静止点なのだ」と<でかぶつ>。「言葉のあやだよ。それは、そういう巨大なマルチプレックス宇宙の重力の中心であり、また、帝国権力の中心でもあるのだ」

「それが帝国の統治の原点なのよ」と娘がいう。

「空間と時間の信じられないほどの圧力が、その一点にかかっているのが想像できるか

ね？ 実在という系はそこで分かたれている。そこではかりその現在の現在が可能な未来とともに確固たる過去といっしょに存在し、しかも全面的に混ざり合っているのだ。もっともマルチプレックスな者だけが、そこに行って来たのと同じ道を見つげられるのだ。水曜日に行けば、必ず百年前の木曜日に、千光年離れたところに出てくることになる」

「そこは時空の裂け目なのよ」と娘がいう。「評議会がそれを管理していて、それで権力が保たれているの。つまり、好きな時に、何が起るかを見に未来に行ったり、起こったことを確かめに過去に行ったりできたなら、多かれ少なかれ宇宙をポケットに入れたも同然だわ」

「多かれ少なかれね」とジョーがいう。「きみはいくつだい？」

「十六よ」と娘。

「おれより二つ歳下だ」とジョー。「それできみは何度エンパイア・スターのその裂け目を通ったんだ？」

「一度もないわ」彼女はびっくりしていった。「ミス・ペリーピッカーを離れたのはこれが初めてよ。そのことは読んで知ってただけなのよ」

ジョーは頷いた。「教えてくれ」 ロジック・ブロックの山を指さす 「この<でかぶつ>はルルの意識を基にしているのかい？」

「わたしは」<でかぶつ>がいいかけた。

「あなたったら全然気がきかないのね」娘が身を正していった。「それがあなたにとってどんな問題になるというの」

「別に」とジョー。吐息をつく。「ただこれがすべて前に起こったことだと思うだけだ。そしてきみにいっておかなくてはならないこともたくさんあると思う」

「どんなこと？」

「彼は何のことをいっているんだね？」<でかぶつ>が尋ねた。

「まあ聞いてくれ」とジョー。「きみが今考えてるよりもルルの解放には少しばかり時間がかかるだろう。しかもきみ自身ルルを所有することの耐えがたい悲しさを経験することになる」

「いいえ、あたしは決して所有は」

「きみはすることになる」と悲しげにジョーはいった。「きみは誰よりも多くのルルを所有することになるのだ。それが多分、きみが彼らを自由にできる唯一の方法なんだろう」ジョーがかぶりを振った。「戦争が起こり、きみの美しく大切なものがたくさん破壊されるだろう」

「ええっ、戦争ですって 誰との……」

ジョーは肩をすくめた。「多分ナクター王子とだろう」

「で、でも、戦争があっても、あたしはしない　ねえ、<でかぶつ>、あなたならあたしが所有などしないのを知って　」

「大ぜいの人が死ぬことになる。経済状態がそんなありさまになれば、再建するにはルルを購入するしかない、評議会もきみも決議するだろう。そしてきみは所有することになる。大きな悲しみやもっとひどいものも担うことになる、きみたち両方がだよ。しかしこれからずっと先に、つまりおれが今きみたちに話したことが起こっている時に、きみたちは一人の少年に出くわすだろう」ジョーはガラスに映る自分の像をちらっと見た。「彼はおれに似ているというつもりだった。だけど彼はそんなに似てないようだ。彼の眼は　　そう、彼は右眼のかわりにこんなガラスみたいなものをつけていない。彼の手は彼の左手には鉤爪がある。彼は最近のおれよりも外にいることが多いから、おれよりもっと色が黒いだろう。彼の言葉はほとんどわからないはずだ。髪の毛はおれのに近い色だろうが、ずっと長く、もつれている　」突然ジョーは小物袋に手を入れてまさぐった。「あった。きみが彼に出会うまで、これを預かっておいてくれ。そして彼にやってくれ」彼女に赤いクシを手渡した。

「預かっておくわ」当惑げに彼女がいう。彼女はそれをためつすがめつした。「彼の話し方がそんなにひどいのなら、あたしが宇宙共通語インターリングの話し方を教えてあげるわ。ミス・ペリーピッカーは語学にはひどくうさかったのよ」

「きみがそうしてくれるのは知ってる」とジョー。「きみたち二人ともおれのことをよく覚えておいて、彼がきみたちのもとにやってきたら、できるだけ彼をおれのようにしてきてくれ。そうすれば、こんなふうな彼を見ることになるだろう」彼はデイクを指し示した。「彼はこんな動物を一匹ペットにしている。今のおれたちのように、彼はエンパイア・スターに向かっているだろうが、その時のきみたちはどこか別のところに行く途中だろう。彼は伝言を届けることになっているが、まだそれが何か知ってはいない。自分自身のこともしっかりせず、どうしてきみがルルのような信じられない生物を所有する気になったかも理解できないだろう」

「だってあたしにもどうしてかわからない　」

「そのときまでにはわかっているさ」とジョー。「彼を安心させてやってくれ。伝えねばならない時までには伝言が何かわかるだろうと教えてやってくれ。彼はひどく不安定な子供なんだよ」

「彼のことを魅力的にはいわないのね」

、ジョーは肩をすくめた。「多分そのときまでにはきみの感覚帯もずっと広がっているさ。彼にもどこがいい　」

「そうね」彼女がクシから眼をあげていった。「あなたは美少年だと思うわ」そして自分

に対する驚きとはにかみが、彼女のほほえみの権利を争った。

ジョーが吹き出した。

「あたし何も……あら、ごめんなさい、あたし」

「違う　　」ジョーは床を転げ回った。「違うよ、その通りなんだ！」足で宙を蹴る。「まさに完璧に万事がその通りなんだよ」坐っていた場所に転がって戻る。そして笑い声がやんだ。

彼女はスカートの折り目をつまんでより合わせている。

「きみを笑ったんじゃない」ジョーがいった。

「そのことじゃないわ」

彼が身をのりだす。「それじゃあ何のことなんだい？」

「ただ　　つまり、あたしがミス・ペリーピッカーをあとにしてから、とても奇妙なことばかり起こっているのよ。それにあたしの会おう人はみんな、何がどうなってるのか、あたしよりたくさんブレップを知ってるみたいだわ」

「……ブレップ？」

「まあ。いうつもりじゃなかったのに。ミス・ペリーピッカーで口癖になってしまったみたい」

「えっ……いったいブレップって何なんだい？」

彼女はくすくすと笑い、彼の方に身をのりだすと、知ってか知らずか声を落とした。「それはミス・ペリーピッカーにいる女の子なら誰でも摘みとるものなの！」

ジョーは頷いた。「漠然としかわからないな。きみはかなり長い間マルチプレックスじゃなかったんだね？」

「そうよ。それに数週間前まで」<でかぶつ>を指さす。「彼もラสป*1と呼ばれていたわ」

「実際」と<でかぶつ>がいった。「彼に全部話す必要はないよ」

「その通り」とジョー。「おれにはわかっているんだ」

「旅に出てからあたしもたくさんの冒険をしたわ。それもみんな奇妙なことばかり」

「どんな冒険？」ジョーが訊いた。「聞かしてくれ」

「一番新しいのは、あたしがこの船の前に乗ってた船でのこと　　そこでは隠れる必要なんてなかったわ　　そこに宇宙共通語インターリングを教えてあげた一人の宇宙船ゴロがいたの。そうして彼はとてもすばらしい詩を書いたわ。その詩はすっかりあたしの人生を変えてくれた　　印象はかなりメロドラマ的だけど、でもあなたにはどんなふうなのかわからないでしょうね。とにかく、彼はあたしに<でかぶつ>を紹介してくれた。<でかぶつ>が<

*1 どこにでも存在する言語シンプレックス

ランブ>になる前の友人だったらしいの。<ランブ>は彼からこの戦艦の中に隠れるアイデアを得たんですって。きっと彼も一度軍隊に追いかけられたことがあるのね、そして」

「ニ・タイは以前にそんなことをしたのか？」

「どうして彼の名を知ってるの？」

「彼の詩は知ってるんだよ」とジョーは答えた。「だからどういうふういきみの人生を変えたかもおれにはわかる。彼は、人生がどれほど自分自身のものであるか、そしてどれほど歴史に関わっているかを教えてくれるんだ」

「そうよ。ええ、まさにそういうふうにあたしも感じたわ！」

彼女は自分の膝を見つめた。「それに帝国の王女ともなれば、歴史に関わるばかりでほとんど自分には何も残らないわ」

「たとえそうでなくても、時にはそうなることもあるし」彼は小物袋からオカリナを取り出した。

「いっしょに演らないか」

「いいわよ」そういうと、彼女もギターを手に取った。彼らは静かに昇っていくメロディを奏でた。ガラス壁の向こうを夜がかすめていく。若者たちが音楽を奏でるのも、船が突き進んでいくのも、その静けさを破るには至らないようだった。

「あなたはまるで」と彼女がいいだした。「あたしのことをよく知ってるみたいにいるのね。あなた、あたしの心を読んでいるの？」

ジョーは首を横に振った。「シンプレックス、コンプレックス、マルチプレックスなのさ」

「まるで何でも知ってるみたいだわ」

「その<ランブ>が、ミュールズ・アランライドの意識を基にしていることは知っている」

彼女は振り返った。「<ランブ>……あなたは教えてくれなかったわ！」

「知らなかったんだよ。ニ・タイは教えてくれなかった。彼はわたしがルルの意識を基にしていると教えてくれただけで、どのルルかはいってくれなかったんだ」

「そしてきみはサン・セヴェリナだ」

彼女が向き直った。「でも、前にあなたは知らないと」

「だけど今は知ってるんだよ」

「時がたつにつれ」と<ランブ>がいう。「人々は学ぶ。それが唯一の希望なのだ」

戦艦の壁を通して、エンパイア・スターの暗く燃えるマルチプレックス星系団が見えてきた。

サン・セヴェリナは壁に歩み寄ると、頬をガラスに押しあてた。「ジョー、あなたはエンパイア・スターの時間の裂け目を通ったことがあるんでしょ？ だから未来のことをそんなに知っているんだわ」

「いや、そうじゃない。ただきみはそうすることになる」

顔をあげた彼女の眼は丸く見開かれていた。「ああ、ではあなたはあたしといっしょに行ってくれるのね？ あたしひとりではこわかったのよ！」

彼女が彼の肩に触った。

「ジョー、あなたはあたしたちが勝てるか勝てないか知ってるの？」

「ただその勝敗が予想以上に長びくのを知っているだけだ」

彼女の手が彼の腕を滑り降り、手をつかんだ。「でもあなたはあたしを助けてくれるわ！ 助けてくれるのよ！」

彼は両手を彼女の肩においた。彼女の手もいっしょにあがる。「おれはきみを手助けする」と彼はいった。エンパイア・スターはずっと近くなっていた。「もちろんおれはきみを手助けするさ、サン・セヴェリナ。きみがおれにしてくれたことに報いるためにも、どうしておれに拒めるといふんだ？」

「あたしが何をしてあげたの？」再び当惑げに彼女が訊いた。

「しいっ」そういって彼は彼女の唇に指を一本あてる。「誰にも答えられない質問をするんなら、それがわかるときまで待たなくちゃね」

ディクが眠りこけたまましゃっくりをし、<でかぶつ>がつつましく咳払いをした。二人は再びエンパイア・スターの方に向き直った。そして人間の眼窩から、わたしも眺め、しかもそれ以上を見た。

わたしはジュエル。

第 15 章

ここまでくれば、マルチプレックスな読者なら、物語が予想以上にずっと、ずっと長く、円環的で自己補足的なのに気付かれたことだろう。わたしはずいぶんはしょらねばならないが、あなたがたの知覚でマルチプレックスに整理しさえすれば、空白部は埋められるはずだ。

全然終わってなどいないではないか！ とのコンプレックスな意見もあるかもしれない。

そうではない。二ページ目を見てごらん。そこでわたしは終わりがあり、ディク、わたし、そしてオカリナはそのときまで彼といっしょだったと、ちゃんと述べている。

モザイク用にタイルを一枚だって？

これでどうだろう。終わりがやってきたのは、サン・セヴェリナが（何度も時間の裂け目を通ったあと）禿げあがり、皺が寄り、傷を負い、治癒し、百年の^{よわい} 齢を重ね、そして彼女の統治権を、名前と多くの辛い思い出とともに捨て去ることを認められたあとのことだった。彼女は大きな^{スリー} 3 ドッグを友に、シャローナと名を改め、リスと呼ばれる衛星に隠居して、そこで五百年もの間輸出区画の門番をしながら、子供たちを親切にもてなす以外、何も課されてはいなかったが、そういうことは彼女の老齢に似つかわしかった。

タイルをもう一枚？ プレップとは水のことであり、それをくうら若き女性のためのミス・ペリーピッカー花嫁学校>の娘たちは、夜明けにライル^{した}羊歯の葉から一滴一滴摘みとったのだ。

そう、わたしには成功や失敗に関する朗報や悪報も伝えることができる。ナクター王子が、八つの世界を焦土と化し、五十二の文明と三万二千三百五十七の完全に別個の倫理大系を持つ社会を破壊した戦争を起こしたこと、小さな敗北だ。そして大いなる勝利とは、ナクター王子が、あなたがたの演繹用に省いておいた一連の出来事を通じて、恐怖で錯乱し、汗みずくになりながら、深夜、地球のセントラル・パークのジャングルに逃げ込んだ時に、密生した樹々の背後からあくびをしながら現れたディクが、まったくの偶然から彼を踏みつけてしまったことだ。そのときにはディクは五十フィートもの成獣の大きさに達していた。

歳老いて禿げあがり、そしてシャローナと称したサン・セヴェリナが、リスと呼ばれる世界にあるブルックリン橋と呼ばれるものの下で、シンプレックス、コンプレックス、マルチプレックスのことを、どのようにコメット・ジョーという子供に教えたかは、すでに述べた。同様に、歳老いて皺が寄り、やがてノーンと称したジョーが、今のところこの物語の中では名前を出していない世界にあるブルックリン橋と呼ばれるものの下で戦艦のうちすてられた船室でいっしょに奏でた歌を、どのようにサン・セヴェリナという子供に教えたかもいうことができる。

また、どのようにルルの最終解放の告知が行なわれたかもいうことができる。群衆が壮麗な音楽の前に静まった時、若い頃宇宙船ゴロとしてルルに歌ってやったことのあるロンという名の男が、今もそのときと同じように、涙に眼をうるませ、感動に半ば喉をつまらせながら、ひしめき合う途方もない大群衆の中で、隣に立っているルルに向かつて、小声で尋ねた「周りに張りつめている関心や、短い歌の信じられないような効果だけでなく、解放の告示を粉々にしてしまいかねないほどの浮かれかたをも指して「今までにこんなすごいものを見たことがあるかい？」

ルルは黙したままだったが、傍にいた東洋風の若者が驚くほど怒りを抑えて、「ああ。あるよ！」と答え、ついでルルに向かつて、「行くぞ、ミュールズ、こんなところにはおさらばしようぜ、どうだい？」そういうと、ルルとその若者は群衆をかきわけていき、わたしが述べてきた物語のような信じられない旅に出発していった。一方、ロンはその場で口をぼかんと開けたまま、その冒険を信じられないでいた。

喜ばしい敗北：ナクター王子がタンタマウントを巡る惑星の凍てつく氷原でジョーの肉体を焼いてしまった時「喜ばしい、なぜなら、そのことはほかの肉体や名前をいろいろと使えるようにジョーを自由にしたからだ。

悲劇的な勝利：セントラル・パークでのディクとの事故のほんの数時間前、栄養液にどっぷり浸ったナクター王子の頭脳を、象牙色の卵の中に隠している測量調査ステーションに、十分に成長した＜でかぶつ＞^{ランブ} 今までの数倍の大きさになって が突っ込み、ナクターの意識を破壊した時「悲劇的だ、なぜなら、＜でかぶつ＞^{ランブ} も結局その衝突で破壊されてしまったからだ。

また、まさに始まりと同時に起こっている終わりを、ついに誰かがルルを解放することになった時のことをいうこともできる。そうして、コメット・ジョー そのときはノーンと呼ばれていた カイ、マービカ、それにわたしが有機宇宙船^{オーガニフォーム}を駆って、S・ドラドスからエンパイア・スターに伝言を運んでいた時、突然、包裏に覆われた機構が故障を起こし、制御できなくなってしまったのだ。われわれ三人が船を救おうと躍起になっていた時に、わたしがちらっと目を向けると、ノーンが前部に立って、故障の原因となったざら

ぎら光る太陽をじっと見つめているのが目に入った。彼が笑い出した。

コースを元に戻そうと四苦八苦しなから、わたしは問いただした。「それで何がそんなにおかしいんだね？」

目を離さずに、ゆっくりと彼はかぶりを振った。「ニ・タイ・リーの詩は何か読んだことがあるかい、ジュエル？」

わたしのいったように、これが始まりだが、まだわたしは知らなかった。それに結晶化もしていなかった。「文学を云々している時じゃあないんだぞ！」わたしはわめいた故障の起こる直前まで、わたしが著わすつもりだった本のことを事細かに喋るのを、彼が何時間も辛抱強く聞いてくれたにもかかわらず。

カイが^{プロト・プロトプラスム}原始原形質を泳ぐようにしてやってきた。「われわれには手の施しようがない」緑っぽいゼリーを通り抜けた光が、恐怖に変色した彼の顔をかすかに映し出す。

おぼろな光が暗闇に広がっていくなかで、じっと立ちつくしたままのノーンをわたしは振り返った。笑い声が跡絶え、涙がその顔に光った。

「衛星があるぞ」マービカが部屋の闇の中から叫んだ。「強行着陸できるかも」

われわれは降りた。

輸出区画を有する単一生産型シンプレックス社会以外の何ものでもないリスと呼ばれるところに。

彼らは死んだ。わたし一人が生き残った。ノーンはほかの者に伝言を託し、わたしはそれが届けられるのを見届けるために生き続け

それとも物語のこの部分は前に話したことがあったかな？

そうは思わない。

およそこの巨大なマルチプレックス宇宙には、ブルックリン橋のように、リスと呼ばれる世界も数多く存在する。それが始まりだ。それが終わりだ。あなたがたが知覚したものをどう整理するか、ある時点から別の時点へどのように旅をするのか、その問題はあなたがたに残しておくことにする。

訳者あとがき

本邦三冊目のディレーニをお届けする。

そして、本書はまた彼の黄金期を飾る作品でもある。

ディレーニの黄金期というのは、彼の六〇年代後半の作品を指し、彼が名実ともに SF 界に認められるようになった熟成期のことである。作品名でいえば、本書の「エンパイア・スター」「バベルー 17」「アインシュタイン交点」「ノヴァ」、そして「スター・ピット」ほかの短篇数篇がそれにあたる（「時は準宝石の螺旋のように」のあとがきで書いたディレーニの第二期作品のことをいっているのだが、前掲のデヴィッド・ハートウェルのまえがきから、新しい情報が得られた。つまり、執筆順が実際の発表とは違っていたのだ。「バベルー 17」「エンパイア・スター」「スター・ピット」の順に書かれたということは、彼の第二期は「バベルー 17」より始まったということに訂正しなければならない。したがって、「エンパイア・スター」が見過ごされたのは、おもにエース・ダブルの体裁とその短さにあったようだ）。

ともかくも、この時期の作品において、ディレーニは SF 界で絶対的な評価を得た。多くの批評家が彼の作品を分析した。しかし、そこで述べられたものは、ほとんどが「バベル-17」であり、「アインシュタイン交点」であり、「ノヴァ」であった。この三つの長篇なくしては、現在のディレーニはありえなかったのだ。

といって、この「エンパイア・スター」が見逃されていいことにはならない。ハートウェルがいうように、「バベルー 17」の姉妹篇として上梓されたのであっても、本書は構造的には次作の「アインシュタイン交点」に、そして「ノヴァ」に近いものをもっている。例えば、コメット・ジョーがもっていたオカリナは、「アインシュタイン交点」の主人公ロ・ロービーのもつ、武器であると同時に楽器でもある山刀マチェーテとなり「ノヴァ」ではマウスがもつ視覚、聴覚、嗅覚に訴える”感覚シリンクス”へと進歩していく。

だが、実際はこの四つの長篇の間には、相互に関連があり、一連の作品と見る方がよいだろう。彼の模索のプロセスが描かれたものとして。

評論家のジェラルド・ジョナスは、この時期のディレーニを「前進と上昇」と題した評論の中で、こう書いている。

彼の最もよく知られた長篇『バベラー 17』(一九六六)、“The Einstein Intersection”(1967)、“Nova”(1968)などは、空想的な未来世界として、稀にみるすばらしい出来栄の見本で、きわめて高い知的想像力と同時に、美学的欲求をも満足させるものを持っている。すくなくとも、ディレーニイは自ら望んで必要な危険を冒している。その結果、不可避的な欠点を持っているものの、これらの作品は、すべて、刺戟的な魅力と、楽しさと、そして伝染性を持つ自信の強さとを兼ねそなえている。

ある意味で、ディレーニイは、饒えかかっていた因襲的なSFの中に、普通ではちょっと考えつかないよう^{アフォリズム} 隠 喩 を用いて、新しい生命を注ぎこんだのだ。(中略)

また別の作品では、標準型分冒険式プロットを抛棄せず、それを、彼一流の目的に沿ってつくりなおす。いま、学者仲間では、ポピュラー・アート形式の^{ミトロジカル・サブストラクチュア} 神話学的下部構造 について語るのが流行しつつある。古い西部劇に旅から旅のガンファイターが登場するように、初期のには^{プラスター} 光線銃一挺を腰に銀河宇宙を股にかけて飛びまわる宇宙船船長が登場し、いつしかSFの主人公の原型的な地位を獲得した。初期の批評家たちは、こうした宇宙大冒険を、子供っぽい逃避趣味の象徴として退けたが、これが再び、聖杯を求め、竜を殺し、世界を『r 危難から救うというような衣をつけて再登場しはじめたのだ。そしてディレーニイのSFの、超現実的な主人公たちは、こうしたすべてのことをやってのける。たとえば「危殆に瀕した全太陽系の運命を賭けて活躍する。両者の間にある相違は、古いスペース・オペラの作家たちが、彼らのインスピレーションの隠れた源泉にまったく気づいていなかったのに対して、ディレーニイがこれに気づき、彼独特の<実況放送>をやってみせるところにある。『アインシュタイン・インターセクション』(一九六七年ネビュラ賞)では、事件は、人類が全く未知の理由で姿を消してしまい、その代りに棲みついた異星生物が、あらゆる犠牲を払って人類文明を再建しようとしている世界で起る。だが、この小説の真のテーマは、ディレーニイがくりかえし明白にしているように、人間には時代と環境の変化に応じた新しい神話が必要だ、ということなのだ。この小説の主人公ロビーは、柄から切先まで中空になった山^{マチェート} 刀を持っていて、打ちふれば音楽を奏でることができる。小説の冒頭で、彼がオルフェウスであり異星生物にとっては過去の人類の事実と伝説とを区別することが困難だったために、同時に「辛き一日の夜の終り」に「泣き叫ぶ女たちの手で八つ裂きに」されたビートル・リングであることが明らかにされる。冒険の旅を重ねるあいだに、ロビーは、フェードラという名の「古代のコンピューター」に遭遇するが、これが、地球上にまだ本物の人間のいた時代のことを記憶している。ロビーとその種族の、

人類百万年のファンタジーを生き返らせようという努力も、彼女にはなんの感動も与えない。「あなたがたは、本質的にそう生まれついていないのよ」と彼女はいう。「でも、新しい迷宮^{メイズ}の中に迷いこむには古い迷宮を壊してしまわなければならないわね」(中略) それらしい題名にもかかわらず、この小説には、著名な科学者の著書からの引用も、科学記事のたぐいの引用もない。だがディレーニイは、彼のいわゆる 科学に対するアマチュアとしての強い関心 を持っていて、その作品のほとんどどれにも、人間のしきたりに対する技術の衝撃といった点への考慮が、れいの神話学的下部構造への関心と同程度に払われている。(中略)

『ノヴァ』は、イルリリオンと呼ばれる、稀有な宝を探して全銀河を渡り歩く話だが、この作品の中でディレーニイは、人間と機械とのあいだに、現代のオートメーション理論^{シンバイオシス}のはるかに先を行く共生関係を仮定している。ディレーニイの架空の未来では、労働はすべて機械がやってしまう。だが、それぞれの仕事そのものは恒星宇宙船を操縦することにしろサイボーグの直接の管理下におかれている。サイボーグは外科手術によって脊髄と首と両手首とにソケットを備えていて、その神経組織は文字通り機械に直結しているのだ。

彼以外の作家ならば、こうしたアイデアからは、完全なユートピア小説をあるいはアンチ・ユートピア小説を作りあげていたかもしれない。だがディレーニイの場合はそれは小説の背景のデテールに過ぎなくなってしまう。彼のサイボーグは技術的スーパーマンでもなければ労働奴隷でもない。プラグを引きぬいたときは、サイボーグは完全に普通の人間にもどってしまう。そしてプラグを入れれば、彼は完全労働者となり、その使う道具と仕事と一体になるのだひこうしたイメージがごくさりげなく取り入れられているために、読者の心の中には、これが、一般になんとか受け入れられている考え方つまり、あらゆる技術革新は、不可避免的に人間を、生産プロセスの中心的な位置から追い払ってしまうという考え方に対する挑戦と感じとれるのだ。(福島正実訳)

長い引用になったが、ちょうど「アインシュタイン交点」と「ノヴァ」について説明していたのでとりあげた次第。この後、「ダググレン」の発表で、彼の作風はがらっと変わるが、それはまた別の話。

カナダの詩人であり、アルバータ大学で教鞭もとっているダグラス・バーバーも、この時期のディレーニイの作品を中心に分析した、二六〇ページにわたる長篇評論「サミュエル・R・ディレーニイの小説における文化的発明と隠喩」において、彼の作品を、探索パターン、芸術家と犯罪者の象徴としての使い方、文化的発明、スタイルと作品構造の四つの観点から捉えて分析し、こう結論づけている。

サミュエル・R・ディレーニが、この論文で考察された三人の作家の中で、芸術についてもっとも自己認識している専門家であることは、その作品が示している。彼自身の使う”マルチプレックス”という言葉は、恐らく彼の著作(姿勢、アイデア、テーマ、技量、それらの相互の関連、そしてまたそれら全部に対する芸術家としての関わり合い)を表現する最上のものであろう。詩人を妻に持ち己自身も詩人であるディレーニは、SF界でもっともすぐれた言葉の魔術師の一人であり、真の”^{メ-カニ}作り手”なのである。絶えず技術を磨き決して過去の業績の上にあぐらをかかない不屈の精神は、初期の七冊の長篇を通じてうかがえる技巧やマルチプレックス性の一定した向上に示されている。小説作法に対する彼の勉強は、小説が”現実の世界”に関して曖昧で婉曲な”現実のモデル”であり、歴史上の記録や新聞記事とは全面的に異なるものであるとの結論に彼を導いた。この認識の結果、彼はSFのもっとも重要な実験家の一人となり、「エンパイア・スター」以後の小説では、新しい、そしてエキサイティングな小説手法を見つけては、自分の創作に取り入れているのだ。

バーバーも同じように執筆順において誤りをおかしているが、その分だけ彼が「エンパイア・スター」を過小評価していないことが強調されている。だいたい彼は「エンパイア・スター」を指してそれまでのディレーニからの”突然の飛躍”とまでいいきっているのだから。因みにいっておくと、この引用の初めでいっている三人の作家のあとの二人は、アーシュラ・K・ル＝グインとジョアンナ・ラスである。

さて、その本書「エンパイア・スター」であるが、これは読んでもらうのが一番いいだろう。ジュディス・メリルもいっている、「”本格派”、気楽な読者、文学的ファン、”ニュー・ウェーブ”派ディレーニはすべての読者にとってすべてのものだ」(浅倉久志訳)と。様々なレベルでこの物語を楽しんでもらいたいというよりも、作者ディレーニの挑戦に対抗してもらいたいと思う。なにしろこの物語はそういう構造をとっているし、それに充分対抗するには、読者はコメット・ジョーとともに旅をし、学習し、マルチプレックスの意識段階にまで達しなければならないのだ。ほんとうに短い作品ではあるが、「ここまでくれば、マルチプレックスな読者なら、物語が予想以上にずっと、ずっと長く、円環的で自己補足的なのに気付かれたことだろう」と本文にもあるように、実際はもっとずっと長いのである。ここに描かれた物語は、巨大なモザイク画のわずかにまとまりをもつ一部分にすぎないのだ。全体を見極めるのは読者に任せられているのだ。しかもディレーニは、最後の最後で、「およその巨大なマルチプレックス宇宙には、ブルックリン橋と呼ばれる世界も数多く存在する。それが始まりだ。それが終わりだ」と、この物語が完璧な円環構造をとっていないことを示唆し、読者を別のより高次な謎の中に引き込んで

いる。このことを見ても、ここには五〇年代にはなかった SF がある。

ディレーニは、かつてどんな作品を書きたいかとの質問に答えて、プラネット・ストーリー調の物語、つまりスペース・オペラを書きたいといった。そして彼の黄金期の作品は、この意志のもとに、スペース・オペラの体裁をとりながら、その中に彼自身の関心言語学、神話、文学等々を詰め込んだものなのである。実際、様々なものが実にさりげなく文章の中に散りばめられているのだ。

ともかくも、ディレーニを語るとき、そうした細々としたものが表立ってき、モザイク用のタイルみたいな断片が次々とあらわれてくるが、それらを一まとめにするには相当な力業が必要になる。現在のところでは、まだ傑作といわれている「アインシュタイン交点」「ノヴァ」が翻訳されていないの順それをなすのは早計だ。今はただディレーニという作家が期待に足る作家であると、この作品で認識してもらいたいと願うだけである。

蛇足を一本。エンパイア・スターであるアウリガとは、御者座のことである。冬の北空に見える五角形を形作る星座である。物語中では Aurigae と所有格で表わされていて、御者座のどの星かは記されていないが、恐らくエプシロンだと思われる。アルファ、ベータ、ガンマはそれぞれカペラ、メンカリナン、エルナトと固有名を持っているから、除外できる。物語中では食連星となっているが、御者座には二重星や変光星が非常に多いのであまりヒントにはならない。ただ複雑な運動と表面温度が低いことから、よほど特徴のある星にちがいないということで、鈴木駿太郎著の「星の事典」をひいてみた。その中で目に止まったのが、エプシロン星なのだ。「キッドの小三角の頂点をなすエプシロン星は周期二十七年という極端に周期の長いアルゴール型変光星であり、また連星でもある。この二星のうち、小さい方が明るく、主星の方はにぶい赤色星で、しかもいくぶん透明であるという。主星はまたスペクトル F_5 型で特殊な様相を示す。このような超巨星を構成分子の一つとする食連星はめずらしい例である」という説明が、いかにもこれだと思わせる。因みにキッドとい弘のは仔山羊を意味し、カペラの近くにあるエプシロン、ゼータ、エータの三つの星によって形作られる小三角形の名であるが、ディレーニの「ダルグレン」の主人公がキッドという名で呼ばれていることにも留意していただきたい。といっても、これはこじつけの域をでないが。

同様に、ジュエルたちが有機宇宙船に乗りかえた星 S・ドムドスは、かじき座 S 星であり、大マゼラン星雲の半分がこの星座内にある。この星も食変光星で、しかも四十年というもっとも長い周期を持つ特異な星なのである。そして、ジョーの故郷であり、数多くの SF の舞台にもなっているタウ・ケチは、もちろん鯨座タウ星で、地球からの距離一一・八光年と近いことで有名だ。

蛇足をもう一本？ 安定のために？ 書誌的なことを少しばかり。ペーパーバック版の「エンパイア・スター」では、ミュールズ・アランライドの名はミュールズ・アロンライドとなっており、サミュエル・R・ディレーニの綴り替え^{アナグラム}にはなっていない。グレッグ・プレス版においてアランライドと改められたのだが、この版はドナルド・ウォルハイム編の「エース・サイエンス・フィクション・リーダー」に収録されたものを原本とした写真版であるため、第九章の最後の一行が脱落している。だから、本書は初めての完全版なのである。

おわび。本文中でシャローナやエルマーが話すスペースマンの言葉というのは、thouを用いた古い形の英語であることをおことわりしておく。

最後に、遅れに遅れて迷惑をかけた山野浩一、佐藤守彦の両氏におわびとともに、感謝の意を表しておきたい。

1980年夏

米村秀雄

訳者紹介：1953年、兵庫県に生まれる。神戸大学工学部卒業。

サンリオ SF 文庫

エンパイア・スター

著者 サミュエル・R・ディレーニ

訳者 米村秀雄©

印刷 1980年8月30日

発行 1980年9月5日

発行者 辻信太郎

発行所 株式会社サンリオ

東京都品川区西五反田7の22の17

電話 03-494-5333

印刷 工友会印刷所

製本 田中製本印刷株式会社

24-B

定価 320円

衛生リスで洞窟農場の世話をしていたコメット・ジョーは、高く沸き立つ泥水から飛び出した、彼と瓜^{うり}二つのものが溶けたあとに残った宝石を手にするや、重要な伝言を銀河文明の中心エンパイア・スターへ届けることになる。実は、それは吉報と凶報の記録を届ける途中で勇氣宇宙船の殻を失ってリスに落ちた全知の異星人の一人が結晶化したものだった。こうして彼は、八本脚のペット^{デヴィル・キトン}悪魔猫の子とオカリナをたずさえ、無知なるシンプレックスからコンプレックスへ、やがて右の眼窩に宝石を植え込んで物事をさまざまな視点から眺められるマルチプレックスへ変移しながら多彩な冒険に出て行くのだ。怪僧ラスプーチンが後期ハイデッガー宇宙論を詐称し、偏執狂的なまでに実在の錯綜する円環構造にこだわりつつ描くSF冒険小説の体裁をとったヘッセの『ガラス玉演戯』を思わせる本書は、凝縮した詩的文体と眩惑をおぼえる視点の交替が彩なす傑作である。